
竜の華は朧月に微睡む

ひなき つぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の華は朧月に微睡む

【Zマーク】

Z4680X

【作者名】

ひなき つぐり

【あらすじ】

竜の華は朧月に舞うの小説集です。
時々思い出したように更新されます。

Happy Birthday (前書き)

筆頭お誕生日記念の特別編です

ヒロインが元の姿に成長してから半年後のお話。

Happy Birthday

「誕生日おめでとーーー！」

唐突に言われて、何のことだか分からなかつた。

満面の笑みを浮かべてこれプレゼントだよーと差し出された着物を見て、今田がオレの生まれた日だということを思い出した。

「これね、喜多さんに教えてもらーながら、頑張ったの。着てみて？」

うふふと笑いながら、オレの背後に回つて、背伸びをしながら着物を羽織りせるツキ。

本来の姿に戻つて半年。

オレの肩にも届かない小さな体全体で感情を表す姿は、出会つた頃から変わらない。

「うん。元璧ー！さすが私！」

オレを頭の先からつま先まで見た後、満足そうに頷いた。

「よく、今日がオレのBirthdayだって知つてたな。

「喜多さんが教えてくれたんだ。」

喜多、良くやつた。後で賞讃を送るぜ。

「一年前はしそうめうつ指に針を刺してたのになあ。人間成長するもんだな。」

「それは忘れin!—!—」

むうつと膨れる顔もCut eだ。

ああ、もう、何をしたってツキはCut eでPrettyなのに、こんなPresentまで賣つちまつたら・・・。

「Thank you .

「You're welcome . 気に入ってくれた?」

「ああ、最高だ。」

それなら良かつたとはにかむツキを抱きしめ、顎に手をかけると、そのままKissをした。

「いのエロバカ宗〜〜!—!—」

真っ赤な顔をして叫ぶツキも可愛いと思つちまつオレは、相当重
症なようだ。

月のない夜に

ふと、意識が浮上して田が覚めた。

まだ虫の音が聞こえる深夜。

虫の声に耳をすませている内に、目が冴えてしまった。

起き上がって布団から出ようとした時、となりでむうと唸る声が聞こえた。

あ、そうか。政宗もいたんだっけ。

起きかけた政宗の頭を一、二回撫でてやると、またそのまま眠りについた。

ゆっくり、起ころなこように布団から出ると、そつと障子を開けて、縁側にでた。

草履を履いて部屋から少し離れると、月のない星空を見上げた。中秋を過ぎて、最初の新月が近づいて来ている。

あの田から、もう一年経つのか。

まあ、半年以上は寝てたらしいから、実感としては半年も経ってないんだけどや。

「そのよつな格好でいっては、風邪をひく。」

ぼんやりとしていると後ろから声がして、振り返ると銀色の毛並のオオカミが、緩く尻尾を振つて佇んでいた。

「白銀。来てたの？黒金は？」

「あれは蒼竜様に呼ばれて出かけた。我一人で居つたのだが、ふと思ひ立つてな。」

置いて来たんか。

こりや後で黒金も遊びに来るだろうな。

確かに、单衣姿で外に出たので、風が吹くと少し寒い。
白銀に寄り添つて暖を取りながら、懐かしいなあと思つた。

「一年前もこいつしてたねえ。」

「あの時は、木曽の山の中だつたがな。」

「だね。あの時は、まさか白銀と黒金が蒼竜様のお使いだなんて思つてもなかつたからなあ。出会いが出会いじゃん？」

白銀が罠に嵌つていたんだよね。

あれは演技とかじやなくて、確實に嵌つてたよ。

「あれは、黒金が……我は巻き込まれたに過ぎぬ……！」

憤慨しだす白銀。

「そつなの？」

「もちろんだ。あの馬鹿者が罠にあつた肉を食べようとしたらか、止めようとしたら勢いが……。」

「へえ。そうだつたんだ。」

まったくあいつは食い意地が張つているからと、愚痴を零す白銀の頭を撫でてやると、気持が良いのか、ふつさふつさと尻尾が揺れた。

「蒼竜様も、黒金も変わりはない？」

「ああ。今はあたらしく出来たばかりの次元の安定を見守つてらつ

しゃる。」

「おお、ビッグバンだ。」

この宇宙の何処かにいらっしゃるのかしい。
空を見上げて、きゅうと白銀の首に抱きつけば、大きな尻尾でくる
んと包んでくれた。

「ねえ、白銀はさ、私が前にいた世界とか行ったりする事ある?」

「あるぜ。」

「そう。」

この世界と、私のいた世界と、見上げる星空は変わらない。
北極星を中心には星は巡り、月は28日周期で満ち欠けを繰り返す。
一人で空を見上げていると、時々もとの世界でまだ一人戦っている
ような錯覚に陥る時がある。

朔夜は、もうどこにも居ないのに。
私の目の前で、死んだのに。

私が、殺したのに・・・。

「ツキ、しつかりいたせ。」
すり、と頭を寄せて来た白銀に、こくんと頷く。
「大丈夫。」

呟く私に、白銀は優しく諭すように言った。
「もう、お前の戦いは終わったのだ。あとは、蒼月華としてではな
く、望月としてでもなく、ただのツキとして、お前の自由に生きる

事にそが、蒼竜様の願いだ。」

うん。わかってる。

あの時最後に見た蒼竜様を思い出す。
私の幸せが、願いだと言つてくれた。
その優しさがとても嬉しかった。

その想いに応えたい。

そう思つ。

無言で抱きついていたと、仕様が無い娘だと、白銀が笑つた。

「せつかく来たんだ。お前の望む場所に連れて行つてやろうか?」

ふふつと楽しそうに笑つた白銀につられて、私も顔を上げた。

「前に連れて行つた温泉とかはどうだ?」

温泉かあ。 そりいえば入つたねえ。

「あの温泉つて前から知つてたの?」

「いや、匂いで探した。あの時、お前は相当凄い姿だったからな。
まずは風呂に入れねばと思つてな。

「

血まみれだったからねえ。

精神的にもちよつとアレだつたし。

「あの時は驚いたぞ。沈んでも浮かんでこなかつたんだからな。
「温泉の中で考え方をしてたんだよ。なのにさ、飛び込んで来て突
き上げるから、びっくりしてお湯を飲んじやつたんじやん。」

むぐれて言えば、くつくつと白銀は笑った。

「確かに、咽せてたな。真っ裸で。」

「ちょっ……何を……！」

「黒金が真っ赤になつて必死に田を逸らしつゝも、心配してたんだぞ？」

「つぎやああ……！」

もう、涙田です。

あの時は白銀も黒金も、ただの狼だと思つてたんだもん！！

不可抗力だ！！

うつうつと白銀の首に顔を埋めて悶絶していると、背後に気配を感じて、ジッパシッと固まつた。

「おもしれえ話をしてるな？」

「昔の話だ。そつ凶悪な顔をするな。」

白銀が呆れたよつて言い、ぽふぽふと尻尾で私の背中を撫でた。

私は今すぐ旅に出たい。

もしくは、この会話ができる数分前に戻りたい！

「ツキ、行きたい場所があるなら、オレが連れてつてやるよ。温泉か？」

白銀にしがみつく私を、無理矢理引き剥がして抱き上げた政宗が、ニヤリと笑つた。

「温泉は結構です！」

越後ではのぼせて倒れるし、山では真っ裸で大変な目にあつたし、もうこりこりだ！

「さて、迎えが来たようだし、我もそろそろ戻らないと黒金がうるさいから戻るとするか。」

やれやれといいつつも、尻尾が揺れている白銀は、立ち上がると政宗を見上げた。

「わうわう。お前に会わせていたら、ツキが壊れる。ほびほびじてやれよ？」

「大事にしてるぜ？ 今夜だつて「何の話かなーーー？」おつと。」

だまらうしゃい！！

そして、白銀はさつと帰れ！！

シャーッ！ と威嚇をすると、白銀はおお恐いと心にも無いことを呟いた。

「くつくつ、その様子なら、こらぬ心配だつたな。では、帰る。またな。」

楽しそうに言つと、白銀はそのまま山の方へ向かつて走つて行つてしまつた。

残つたのは、私を抱き上げたまま愉快そうに笑う政宗と、真っ赤な顔で政宗の肩に顔を埋める私。

「うつ、この状況どうしてくれよっか。

「ツキ、どこかに行きたいのか?」

部屋に向かつて歩き出した政宗が、うつて変わって眞面目な声で尋ねた。

肩から顔を離して、前を見て歩く政宗の横顔を見る。

「そんなの、一つしかないよ。」

あの日から、私の求める場所は、ただ一つ。

「それはどこなんだよ?連れてつてやるよ。だから、一人で行くなよ?」

ピタリと足を止めて恐い顔をする政宗の前に頭を寄せて、私はクスッと笑つた。

「うう。」

政宗のいる場所。
ここに居たいの。

少しの間呆けていた政宗は、私の言葉を理解すると、嬉しそうにでも照れたように顔を赤くした。

うわ、貴重な顔だなあ。

クスクス笑う私を抱え直すと、政宗は足早にまた歩き出した。

「ほどほど、は無理だな。」

「は?」

「そんな可愛い事を言われたら、我慢は無理だつて話だ。」

は？え？な？

呆然と運ばれる私に待つて居たのは、足腰立たなくなるまで致されて、喜多さんに呆れられるという、とほほな朝だった。

教訓。

口に出す言葉は、後先を良く考えてから発しましょう。

子犬と出会いました 前編（前書き）

necoo様の作品「炎色の萩」とコラボしました。
ホーイ・・・ヘ(=)ノ

ヒヤツ

子犬と出合いました 前編

ある日、ひつそり抜け出した山の中で、らぶりいな女の子に会いました。

いつもの山の、いつもの川で、ひと休憩してから帰るかなあと草を搔き分けた所に、その子が足首を押さえて座り込んでいた。

私より小柄な、丸い黒目がちの可愛い女の子。服装からして、忍っぽいんだけど……。

その女の子は、警戒心剥き出しで私を見ていて、同時に辺りに気を配つてゐる。

私以外の人があるかと警戒してゐるんだろう。黒脛巾組ならば、当然私の事は知つてゐるはず。こんな警戒心丸出しな態度はしないだろう。つてことは、他所の忍かあ。

うーむ。
どうしたもんか。

「えと、足大丈夫?」

とりあえず聞いてみる。

女の子は警戒したまま、じくつと頷いた。

「立てる?」

少し考えたあと、女の子は悔しそうに首をふつた。

「触つてもいい?」

立てる程度には治癒しようかと思つて言つてみたけど、女の子はじりつと後ずさつてしまつた。

困ったなあ。

どつしょつかと頭を搔いていると、後ろから人の気配がして、私と女子子同時にぎくつと顔を強張らせた。

「や、ヤバイ……。」

最初に言つたとおり、私はこつそりこじに来ました。
こつそりつて事は、誰にも何も言つてないつて事で。
前方ではなくて、私の後方から聞こえるつて事は、間違いなく私を
追つて来たつて事ですよね。

そわそわしだす私を訝し気に見上げる女子子。

仕方ない。この子を残してトンズラするわけにもいかないし。
はあつとため息を吐いて後ろを振り返り、近づいてくる気配の主を
待つた。

後ろの女子子は、動けないのか動く気がないのか、じつとしている。

「あー、お嬢いたいた。」

現れたのは、忍装束を着た女。

「空夜？あれ。任務中じやなかつたの？」

空夜は、無口が多い黒脛巾組の中で珍しく佐助並に良く喋る忍で、
任務が無いときはお土産とか持つてくれるとても良い人だ。
この前は、越後の帰りに日本酒をこつそり持つて帰つてくれて、
一人で飲んだんだよねえ。

今は任務でどつかに行つてたと思つたのに。

「さつき戻つてきたばかり。お嬢が抜け出したと若が大騒ぎして
る所に帰つちやつて、もつとばっちりも良いとこだ。」

「うげ！…」

「門を出た時点で、お頭が報告をあげたらしこせ？」

なんていつたい・・・。

もつと警戒して出かければ良かった！！

頭を抱えて唸る私の後ろで、女の子が控えめに口を開いた。

「あの・・・空夜さん・・・。」

「ほえ？この空夜の知り合い？」

空夜を見上げれば、女の子を見て目を丸くしていた。

「あれま。小萩じやん。どしたの？」

「使いを頼まれたんです。でも、足をすべらせてしまつて。」

うつむいてしゅんとする様は、もうなんといふか、おねいさんに全てまかせたんやーいー！と叫びたくなるほど可愛らしい。

はふーはふーと鼻息荒く女の子を見ていると、空夜が呆れ気味に私を見た。

「お嬢、変質者っぽいからそれやめたほうがいいぞ？」

「空夜、今すぐそこの激烈可愛い子を私に紹介しやがれお願ひします。」

「・・・言語が乱れてるぞ？」

いいからー！

「あー、小萩、この人は・・・えと・・・その・・・。」

なにまじついてんのよ。

イライラしながら空夜を見上げると、困ったような顔をして見返された。

「なあ、お嬢つて結局どんな立場になるの？」

「は？」

「だつてさ、若の家臣でもないし、兵士でもないし、俺ら忍とも違

うじ。」

そつ言われればそつだね。

今までには居候で通してきたけど、それも違うしなあ・・・。

「うーん、一応客人扱いだつたけどねえ。今は仕事もしてゐしなあ。
あ！政宗の守役一号つてのはどう！？」

一号はもちろん小十郎だ。

散々お世話してやつてるし、これが一番しつくつくるかな。

「いやあ、それ若が聞いたら、お嬢ど偉い目にあつぜ？」「

ぼそつと呟いた空夜の声は無視です。

「まあ、いいや。とにかく、この人はツキ。んで、こいつはなにかす兄の弟子の小萩。今はさす兄の所で武田に仕えてる。」

「小萩と申します。」

ぺこりと頭を下げる小萩ちゃん。

うむ。らぶりいな生き物は何をしても可愛い。

「ツキです。つてな訳で、足見せて？」

は？と怪訝そうな顔をする小萩ちゃんの前にしゃがんで、押さえて
いる手をそつとどけた。

けつこう腫れてるなあ。折れとはいみたいだけじ。

「捻挫だねえ。痛かったでしょ。すぐ治してあげるからね。」

撫でる様にゆっくり手を患部に当てると、蒼い光がぼうっと灯った。

「お嬢は癒しの力を持つてるのさ。」

固まつて足を凝視している小萩ちゃんに、空夜が苦笑しながら教えた。

「これでよしぃと。立つてみて？」

「はい。」

素直にゅうくり立ち上がる小萩ちゃん。

立つて、驚いたような顔をして、足踏みして、ジャンプして、それから私を見た。

「すごいですね！全然痛くない！」

キラキラした目でこちらを見る小萩ちゃんに、何か既視感を覚える。

「ねえ、空夜。この純粋培養な瞳をどこかで見た事あるんだけど、どこのだつたかな。少なくとも、伊達には居ないよね？」

こんなのが欲しつゝて強烈に思ったことがあつたよつた。

「ゴッキーじゃね？ 属性同じだし。」

ああ、幸村に似てるのか。

可愛いなあ。幸村とちがつて、小さいし、女の子だし。
連れて帰りたいけど、お使いの途中つて言つてたしなあ。
頭を撫でても怒られないかな？ わしゃわしゃっ！ て撫でたい！

両手をワキワキと動かして葛藤していると、空夜がそつそっぽと、
小萩ちゃんを見下ろした。

「小萩、使いつてうちに用事か？」

「あ、はい。伊達殿に書簡を届けに。」

なんと！ 持ち帰れる！！

「なら一緒に行こう！ 私の部屋にこの前ひつそり用意した甘味があるから、一緒に食べよつー。」

「甘味・・・。」

きらーんと小萩ちゃんの目が光つた。
決まりだね！！

私の頭を押さえつけながら、空夜が落ち着け！となだめるけど、わっほーい！とハイテンションに喜んでいた私はすっかり忘れていた。

抜け出してきたことが、すでに政宗にござっていたということを。この後私に待ち構えている運命を。

いつかの様に、門の前で仁王立ちしている政宗と小十郎を見るまでは。

この歳になつて、正座で説教されるとか、もうほんと泣けます。
とほほ・・・。

子犬と出合いました 後編

久しぶりに説教されて、ただいま部屋でぐつたりしております。

「うう、あの一人の波状攻撃は、言い訳を挟む隙がないんだよ。黒脛巾どもめ。逐一なんでもかんでも政宗に報告しやがつてえええ。くそー。こいつそ裏で黒脛巾組を配下に置いてくれようが。

ハツ当たりでぶちぶち黒脛巾組を呪つていると、庭に気配を感じて起き上がった。

「あの・・・大丈夫ですか？」

心配そうな顔で立つっていたのは、小萩ちゃんだった。

うつう！優しい！

オー悪魔の様な奴らからの仕打ちの後は、優しさが余計身に染みるわ。

「ありがとう。優しいのは小萩ちゃんだけだよお。」

入つて、入つてと、手招きをして、小萩ちゃんが座る円座を用意する。

「や！」に座つて。今お茶を用意するねー。」

「あ、お構いなく。」

「いいから、いいからー。」

遠慮がちする小萩ちゃんの腕をつかんで円座に座らせると、この前買った茶箪笥からお茶のセットを取り出す。

「空夜、お湯貰つてきてー。」

甘味を狙つて天井に潜んでいる空夜に言つとい、あいよーと返事が聞こえた。

「小萩ちゃん、お使いは終わった?」

「はい。後は返書を持ち帰れば終わりです。」

返書は今政宗が用意しているらしく、その間の時間にとひしひへきたらしい。

「それに。足を治して頂いたお礼も言つてませんから。」
とのこと。

なんて律儀な子!!

感動した!!

「うう、最近唯我独尊な奴らに囲まれてたから、沁みるわあ。」

目尻の涙を拭いながら、茶菓子を差し出す。

この前作ったドライフルーツだ。

砂糖がなかつたので、飴玉で作つてみたんだけど、意外にうまい
つた。

「「れはりん」」で、「こちは桃。」

どちらもこの前佐助が持つてきただものだ。

勧めると、恐る恐るりんごのドライフルーツを摘まんで、口に入れ
る小萩ちゃん。

「美味しい・・・」

目を丸くしてドライフルーツを見つめている。

良かつた。口にあつた様だ。

「良かつたら、後で袋に詰めるからお土産に持つて帰つてね?」

「ありがとうございます!」

ふおお! 小萩ちゃんの後ろに尻尾が!! 全開でブンブン振り回され
てる尻尾が見える!

眼福じやー。

ほのぼのとしていると、空夜がお湯を持って帰ってきた。
それを受け取つてお茶を入れながら、空夜にもドライフルーツを勧める。

「ああ、この前こりそり作つてたやつか。へえ、りんごがこんな風になるとは。」

しげしげと眺めて口に放り込むと、むぐむぐと口の中で転がす。

「もうすぐ柿がなつたら、渋柿の焼酎漬けも作りたいなあ。九州からなんとか焼酎を仕入れられないかな。」

入れたお茶を小萩ちゃんと空夜の前に置きながら、空夜に向ひ。

「俺のつてで良いのが居るよ。そいつに手配するよ！」
「ぜ。で、その焼酎漬けってどんなんだ？」

「渋柿を焼酎に漬けてから密閉空間に置いておくと、渋みがなくなつて甘くなるんだよ。」

「なーんだ。美味しい酒になるのかと思った。」

あからさまにがっかりする空夜に対し、小萩ちゃんが期待に満ちた目で私を見ている。

甘いの大好きなんだなあ。

「出来上がつたら手紙を書くから、ぜひ食べにきてね？」

「つー！はいっ！」

とても嬉しそうな顔の小萩ちゃんに、私ノックダウンです。

「ぐ、空夜、鼻血出る。懐紙くれ。」

「おーおー、しつかりしろよ。」

だつてーあまり表情変わらないけど、この子笑つと破壊力すげえよ

！？

小十郎が笑うより威力あるわあ。

「もう、いつそうちの子にならない？」

ぜひ欲しい。私の癒しわんこ！――

本気で引抜を持ちかけようとした時。

「ちよっとー、うちの小萩を勝手に引き抜こうとしないでくれるかなあ？」

「師匠！」

「わす兄！」

すたつと庭に佐助が現れて、油断も隙もないなあとぼやいた。

「だつて、そつちは幸村もいるし、勘様もいるじゃん。うちにも癒しキャラよこせ！」

「旦那はともかく、山本の旦那に癒しはないでしょ？が。

「あの魅力がわからんとは、愚か者め。」

縁側に座る佐助にお茶を入れながら、ふんッと鼻で笑えば、佐助はそれならさと、笑った。

「ツキちゃんがうちに来る？大将も旦那も両手あげて歓迎するよ？」

まだ諦めてなかつたんかい。

まあ、その気持ち嬉しいけどね。

「わす兄、それシャレにならないからやめてくれ。」

青い顔の空夜が慌てて佐助を止めた。

が、間に合わず。

「武田はうちと全面対決するってことか？」

いきなり政宗の声がして、全員が入り口を振り返った。

あちやーっと空夜が頭を抱え、佐助の顔が若干赤らついて居る。

小萩ちゃんは空氣を読まずに桃のドライフルーツを口にこれでもぐもぐ。

私はそんな小萩ちゃんこれも美味しいよーと、もなかを差し出す。

「お、お嬢空氣を読んでくれ。できれば助けて?」
すがる様な空夜に、じつこりと微笑む。

「私の癒しの時間を邪魔すんな。」

後ろでは佐助と空夜と政宗の怒号が飛び交っているけど、気にしない。

時折何かが壊れる音も聞こえるけど、後で政宗に修理をさせながら問題なし。

「小萩ちゃん、今度は泊まりで遊びにおいでね?」

「ありがとうございます。」

はにかむ小萩ちゃんに至福を得る。

ああ、こんな妹が欲しい・・・。

「ちゅー竜の旦那!! それはやばいって!!!」

「若ーー! こがどこだかわかつてやつてるーー。」

「お前ら全員吹き飛べeeeee・・・。」

「政宗、それやつたら、喜多さんにチクるからね？」
「私」と吹き飛ばす氣か！！

「…………」

喜多さんの名前に一瞬凍りついた後、しぶしぶ刀を納める政宗の前には、力尽きて倒れる忍が一人。
まったくもう、手加減を知らないんだから。
呆れつつ政宗を見上げると、懐から白いものがはみ出しているのが見えた。

「政宗は返書が出来上がつて持つてきたの？」
「あ？ ああ。 まあな。」

そつか。もう小萩ちゃんは行つちやうのか・・・。
残念だ。心から残念だ。

「佐助のお迎えも来ちやつたもんね・・・。仕方が無いか。」

「え？ 師匠がわざわざ僕を迎えるに？」

びっくりして齧り付いた最中から顔を上げる小萩ちゃんの顔が、ほんのり赤い。

・・・・・へえ・・・・・・・・

「任務ついでだ。わざわざ迎えに来たわけじゃないよ。」

こちらは飄々とした顔の佐助だけど、初めて会った時も確か幸村が心配で様子を見に来たんだつたよね。
まったく、心配性の母親め。

しかし、小萩ちゃん……。

ちらりと佐助を見る。

ああいうのが良いのですか。へえ。

「お嬢、顔がにやけてるよ?」

おっと。いかんいかん。

慌てて顔を引き締めると、ドライフルーツを巾着に入れて小萩ちゃんに手渡す。

「がんばってね?」

渡しながらそつと耳元で囁くのも忘れない。

とたんに顔を真っ赤にして、違いますからああああーーと呟んで飛び出していつてしまつた。

あ・・・返書・・・。

「やれやれ、まだまだだなあ。」

返書を小萩ちゃんの代わりに受け取つて、佐助は溜息をついた。

「まあまあ。今のは私が悪かつた。叱らないであげてね?」

「なにを言つたの?」

「んー・・・秘密。」

これは小萩ちゃんが自分で言わなきやならないことだからね。空夜も勘付いているのか、にやにやしている。

腑に落ちない顔をしつつも、先に行つた小萩ちゃんが気になるのか、佐助は返書を懷にしまつと小萩ちゃんが飛び出した方向を見た。

「気をつけてね。」

「はいはい。」

じゃ、と呟くと、佐助はそのまま一瞬で消えた。

「さて、部屋の片付けですよ？政宗？空夜？」

私の部屋は、台風が来たのかつてくらいしつちやかめつちやかになつてる。

フルスマイルで一人に告げれば、顔を引きつらせてあははと笑つた。

子犬と出会いました 後編（後書き）

「」の先小萩ちゃんがどう成長していくのかは、neco様のみぞ
知る（笑）

初雪テス（前書き）

スキーツアーのパンフレットを眺めてて、思いつきました。

雪が降った。

そりやもひ、一晩で数十センチ級に。

朝起きて、あまりの寒さに何事かと障子をあけてびっくりした。

「雪が降つたらやめ」とは一つと決まつてゐる……」

流石に単衣じや寒すぎるるので、着物を羽織つて、ござ準備完了。

「もつは—————！」

「朝からひつねせえぞ、ツキ。」

小十郎が部屋に入ってきたのと同時に、縁側から外へ大の字のままダイブ！！

「ツキ！…」

ぎょっとした小十郎が走りよつてくるが、私はゆっくり起き上がり、自分で作った型を見下ろす。

「見てみて！押し型！」

あはは！と笑いながら血漫すると、がつくりと縁側に座り込んだ小十郎は溜息をついた。

「全身雪まみれだぞ。早くこっちに来い。」

どうやらお氣に召さなかつたらしい。ちえ。

「雪なんざ、これから数ヶ月毎日嫌でも見る羽田になるんだぜ？」

うんざり感を漂わせる小十郎。

そうかもしれないけどさ、今日は初雪じやん？

「それでも、私は遊びたい！」

てい！と作った雪玉を小十郎に向けて雪を投げつける。

「甘いな。」

ひょいと小十郎にかわされた雪玉は、そのまま部屋の中へ。

「なに騒いでるんだ?」「

襖を開けて中に入つてくる政宗。

「「あー!」

ばふ!

勢いの良すぎた雪玉は、そのまま政宗の顔面に直撃して、粉碎した。

「ま、政宗様! ! !

慌てて立ち上がる少十郎を片手で制して、顔を雪まみれにしたままの政宗は、無言で部屋を突っ切つて庭に下りてきた。

「「あんつて。政宗に当てるつもりは……つて、さやあああ! ! !

ばふ! ! !

大きな手で作られた雪玉は、私が作ったの物の倍はあった。顔中が雪まみれになつた私。

「HA! 可愛くなつたぜ? ツキ! 」

すつきりしたつて顔の政宗。

「・・・上等だ、ゴルア・・・。」

かくして、政宗の雪合戦といふ名の壮絶な死闘が始まった。

ぎやーぎやー大騒ぎをしているうちに、何事かと人が集まりだし、

気がつくと人だかりができていた。

小十郎も喜多さんも諦めの境地というか、用意した火鉢の横でほのぼのとお茶をすすつてる。

「お前ら見てないで手伝つて！！」

「うなりや人海戦術だ！！」

ノリの良い伊達軍の連中は、いいんすか！？とか言いながら、嬉しそうに寄ってきた。

「テメエ！ツキ！卑怯だぞ！！！」

「うるさい！！私が正義だ！！！」

「てめえは浅井長政か！！」

「そんな人知らんがな！！」

言い合つ間も、雪玉は途切れることなく飛び交つてゐる。

私も政宗も雪まみれだけど、楽しい。

多分今私の顔は、笑顔全開だろう。

政宗も楽しそうだ。

「小十郎！！おめえはオレの見方だよな！？」

「は！？」

「手伝え！」

政宗はついに最終兵器を投入することにしたらしい。

無理矢理参戦させられた小十郎に、容赦なく雪玉をぶつける。

「将を射んと欲すれば先ず馬を射よつてね！！」

「流石ですか嬢！！」

後ろから離し立てる兵士たちに、ピースサインなんてしてみたり。

「上等だ。後ろから殺られても文句は言えねえぜ？」

地の底から湧き上がるよつた小十郎の声が聞こえて、慌てて振り返ると、極殺モードに入った小十郎が私をガン見していた。

「や、ヤバイ。私今死亡フラグ立つたっぽい……？」

「野郎共！お嬢を守るんだ！！」

「おお！……・・・・・か、片倉様！…それはさやああああ！…！」

「文七郎！…」

雪合戦の禁断奥義、雷仕込みの雪球が飛んできて、文七郎が直撃を食らって撃沈した。

「お、おのれ・・・・・文七郎、お前の犠牲は無駄にはしない・・・」

ぐぐう！と涙を拭う仕草をして、小十郎と政宗を睨みつける。

「そつちがその気ならば、いかにも容赦はしない・・・！」

「え？ お嬢？」

さやーっと青褪める兵士の顔さんに、私はにっこり微笑む。

「咄！私の為に、逝つてくれ！…」

「わやあああああ！…」

飛んでくる雷を帶びた雪球を兵士どもを盾にして避け、こちらは筋力増強の殺人級の剛速球で投げつける。

「くらえ！…消える魔球！…」

「H A !…当たらねえよ！…」

余裕綽々で、腕組みをたまま避ける政宗。

次々と手渡される雪玉を投げつけまくるが、一つも当たらない。

「やるな、花形君！だが、これはどうだ！」

いつぺんに一つ手に持つて、コンマ数秒差で投げつける。

「ぐはあ！！」

一発目が見事に政宗の顔面に当たり、のけぞつて倒れた。やりい！！

「政宗様！！この仇は小十郎めが！！」

「まだ死んでねえよ！！」

闘志を燃やす小十郎に、涙目で立ち上がって訴える政宗。

ふつふつふ。そろそろ止めと行こうかね。

背後で雪玉を作り続ける兵士たちに、最後の指示を出そうとしたとき、良直が駆け寄ってきた。

「お嬢！！左馬之助が新兵器を開発しやしたぜ！！」

「でかした！！って、それだけえ！！投げらんないって！！」

岩かつてくらいでかい雪の塊が、男一人がかりで運び込まれる。

これをどうしろっていうのよ。

雪だるまでも作って、壁にするか？

・・・壁？

「そうだ！！孫兵衛、左馬之助！そのまま突っ込め！！」

「「「げええええ！！」」

名づけて人の壁大作戦！！

二人が壁に氣を取られている隙に、一気に決めるぜーー！

「上等だあ！！叩き斬つてくれるーー！」

「小十郎！刀はダメだろうが！！」

兵士たちには容赦ない小十郎が、腰の刀を抜き放ち、政宗が慌てて止めに入る。

・・・小十郎つて熱くなつたらこゝなるんだね・・・。

楽しい雪合戦から、阿鼻叫喚地獄に変わつた伊達軍オールスター
ズ雪合戦は、綱元さんの仕事ですよ？というお言葉で閉幕したので
ありました。

・・・目が笑つてなかつた綱元さんが恐かったです。

雪合戦のあとは・・・。(前書き)

初雪バスの続きをバス。

雪合戦のあとは・・・。

風邪を引きました。

一人で寝ている部屋がやたら広く感じます。

昨日初雪が降って、雪の中遊んだのが敗因か・・・。

少しだけ開いた障子の隙間から、今も降り続く雪が見える。

雪の滅多に降らない土地で育つて、それから後も雪が積もるような場所には居なかつたせいか、雪に年甲斐もなく大はしゃぎしちゃつたんだよね。

珍しく小十郎まで参加したから、余計にヒートアップしちゃつたし。

あれだけ皆でびしょ濡れになつたのに、風邪を引いたのは私だけという、なんとも情けない現状。

今皆は雪かきをしている。

皆さん流石ですねとしか言えない。

「のび・・・かわいた・・・。」

すっかり鼻声になつてゐる自分の声も、情けなさを倍増させてくれる。

布団から起き上がりつて、枕元に置かれた水を飲む。

はふーっと熱の籠つた溜息を一つつくと、じてんと真横に倒れた。

畳が頬に当たつて、冷たくて気持ち良い。

そのまましばらぐじつをしていると、後ろで襖が開く音がした。

「ツキ、ちゃんと布団で寝る。」

雪かきが終わったのか、小十郎が現れた。

「暑い。床気持ちいい。」

「熱が上がってるんだ。我慢しない。」

私の右腕と左脇腹を支えて布団に寝そべりする小十郎。

「あーついー。」

自分で意味がないと思いつつ、わがままを言ってみたり。
うー、だるいし暑いし、でもぞくぞくと寒いし、身体中あちこち痛
いし、機嫌もよろしくないのですよ。

「ツキ。子供じやねえんだから、ちやんと寝ろ。」

呆れる小十郎に、むすつとなる。

「なんで私だけ？小十郎も風邪引けばいいのに。」

「鍛え方が違うんだ。お前ももつと野菜を食つて、体を鍛えろ。」
野菜じや体は鍛えられないと思いますが・・・。

あ、いや、ビタミンとればいいのか？

なんて考えていると、何時の間にか布団に寝かせられて、乱れた
単衣を整えられていた。

「うう、年頃の女がしてもらひつことじやないよう。」

流石に、男の人に直してもらひつのは恥ずかしいのですよ！
ますます熱が上がった気がする。

「そう思うなら、大人しく寝てろ。」

「あい。」

搔巻を掛けてもらひつと、はふーっとため息を吐いた。

「なんか欲しいもんはあるか？」

額に手を当てて熱を測りながら、小十郎が顔を覗き込んだ。

「んー。ない。」

本当はアイス食べたいとか、冷凍みかん食べたいとかあるけど、この世界にあるわけない。

「そうか。」

乱れた前髪を直しながら頭を撫でる小十郎の手の感触で、元気になった翌日にも熱が出たことを思い出した。

あの時は熱を測られるだけでも、びくついてた。なのに、今は着物を直してもひらひら様にまでなったか。ははは・・・。

「なんだ？」

「いや、前もこんな風にして貰つたなあと想つて。」

「・・・ああ。拾つた翌日か。」

拾つたつて・・・まあ、そりなんだけれど。

「あの頃も、今もじつとしてねえのは変わらねえな。あづ。呆れられてるし。

むうつとして、搔巻をすり上げて、顔を隠す。

「どうせ、良い年して落ち着きが足りませんよーだ。」

「ま、落ち着いたツキなんぞツキじゃねえってことだな。」

よしよしと頭を撫でられて、ますますむくれる。

小十郎は口では子供じゃないんだからって言つても、私をまだ子供扱いするんだよね。

もう元の姿に戻つたつて言つたじゃー。

「もう一眠りしてろ。あと一刻程で夕餉だ。」

「はーい。」

やけくそで子供の様に返事をしてやれば、小十郎は少し笑つてまた私の頭をひと撫でしてから、部屋を出て行つた。

治癒しちゃえればいいんじゃね?とか思われがちなんだけど、病気つて治癒効果が元々薄いんだよ。

まして、治癒が苦手な私が自分にかけたつて、大した効果は無いん

だよね。

自力で治すしかないとなんだけど・・・。
何日で治るかな、これ。

あーあ、雪遊びは楽しかったのにな・・・。

外の景色を見ようと、縁側の方へ寝返りをした瞬間、障子の隙間から四つの田がこちらを覗いていて、悲鳴を上げかけた。

「なつ！？ つげほつ！ じほつ！！」

体を丸めて咳き込んでいると、障子ががらりと開いて、慌てた様子の良直が飛び込んできて背中をさすった。

「す、すいやせん。お嬢。驚かすつもりは・・・。」

「げほつ！ だ、いじよぶ。ごほつ、み、みず・・・。」

孫兵衛がさつと湯飲みを差し出してくれたのを受け取って、一口飲み込む。

水分が喉に浸透して、なんとか咳が収まった。

「はあ、ありがと。」

人心地ついて、改めて四人を見回す。

昨日も一緒に雪合戦をした、良直、孫兵衛、左馬之助、文七郎だ。

「どうしたの？ 小十郎ならさつきに行っちゃったけど？」

「お嬢が熱を出したって聞いたもんで。」

左馬之助がおずおずと答えると、他の二人も肩を小さくして頷いた。

「心配で様子を見に来たんです。」

「そつそつ。」

「まだ熱は高いんですかい？」

代わる代わる質問されて、面食らいつつも四人の気持が嬉しい。

「大丈夫。風邪なんて、寝てれば治るんだから。それより、昨日はかなりアレな雪合戦だつたけど、皆は平氣なの？」

怪我は昨日のうちに治癒しておいたから、問題は無いはずだけど。見た感じにも、全員元気そうだ。

「俺らは大丈夫です。鍛えてますから！」

良直が胸を張つて答えた。

ブルータスお前もか！！

良直が胸を張つて答えた。

ブルータスお前もか！！

しばらく話をした後、御大事にと去つていった四人を見送つて、再び布団に転がる。

くそー。このままでは病弱の烙印を押されちゃうつよ。

鍛えれば風邪を引かなくなるのか？

野菜を食べれば良いのか？

うーん。とりあえず、風邪が治つたら、一から体を鍛えなおすかな。最近寒くてさぼりがちだつたし・・・。

考えているうちに、瞼が重くなつて次第に意識が遠退いていった。

真っ白な雪原の中に、一人だけで立っている。

どこまでも続く雪原と並行する蒼い空。

粉雪が風に舞つて、太陽に反射されてダイヤモンドダストのよひにキラキラと光つた。

綺麗だけど、冷たくて、寂しく感じる。
どうして私は一人でここに居るのだろう。
皆はどこにいるの？

振り返れば、今まで歩いてきたであろう足跡が、どこまでも続いていた。

前は何一つ跡のない雪原。

歩けば良いのか。
待てば良いのか。

どちらにしても、一人は寂しい・・・。

カタシと小さな物音がして、目が覚めた。

ぼんやりと音のした方向に首を傾けると、ちょうど政宗が夕餉の乗つた膳を置く所で、いい匂いも漂ってきた。

「起しちまつたか。」

ぼーっと見上げる私に政宗は苦笑すると、枕元に胡坐をかいた。

「どうだ?」

額に手を当てて熱を測りながら、じちらを覗き込む政宗。

今のは、夢・・・?

それとも、じちらが夢?

「んー・・・。」

今ひとつ何を聞かれているのか、理解ができなくて曖昧に返事をしていると、政宗は眉を寄せた。

「ずいぶん熱がまだ高いな。飯は食えそうか?」

「んー・・・。」

「起きれるか?」

「んー・・・。」

背中を支えて起されて、そのまま政宗の方に寄りかかる。

寝起きのか、熱のせいか、ぼーとした頭のまま、政宗を見上げる。本物だ。こつちは現実。

一人じゃない。

「まずはこれを飲め。」「

白湯を渡され、ゆっくり飲んでいくつひ、少しづつ頭がクリアになってきた。

「ありがと。」「

湯飲みを返して、はふーっと息をつく。

だるい体に力を入れて、政宗から離れて膳の所に正座する。

まだ節々が痛い。

夜になつてあとどれだけ上がるかだな。

食べるだけ食べて、そつそと寝て、早く回復しなきや。

「ほり、食えるか?」

お椀によそられたおかゆを差し出されて、受け取る。

「いただきます。」

ぼやつと言つた声は、先程より掠れが激しくなつてる。

「喜多さんはどうでしたの?」

「いつこうときに活躍しそうな喜多さんを、今日はまだ一度も見てない。

まさか風邪引いたとかじゃないよね?」

「ツキに風邪引かせたのは、オレと小十郎だから面倒見ろつて言われた。」「

「は?」「

驚いて政宗を見上げると、ぼやつが悪そうな顔をしている。

「悪かったな。」「

「政宗たちのせいじやないよ？薄着で遊んでたのは私だし。鍛え方が足りないらしいし？」

どちらも私が油断したせいでしょう？

首を傾げると、政宗はちょっとだけ嫌そうな顔になった。

「お前がそれ以上鍛えたら、洒落にならねえからやめろ。」

それはどういう意味ですかねえ？

言い返したことないだけ、今日の所はそんな元気もないし、勘弁してやろう。

と、匙でおかゆをすくって口に運ぶ。

歯(1)たえ無し。味も鼻が壊れているのであまり感じられない。でも、微かに出汁の味が利いてるのは分かった。

「ゅっくつ食え。」

「うん。これ美味しいね。」

「・・・・・そうか。」

なぜ、政宗が照れるの？

・・・つて、まさか、これも政宗が・・・！？

思わず凝視をすると、政宗は早く食つちまえーと叫んだ。言つてることが数十秒前と真逆になつてゐる。

政宗が作ったおかゆは、にやける顔のまま、ゅっくつ食べながらいただきました。

食べ終わつたツキが再び布団に横になると、枕元に座つて搔巻を掛けなおしてやる。

「あとは寝てねば治るから、大丈夫だよ？」

政宗はまだ夕飯食べてないでしょ？

と心配するツキの頭をゆっくりと撫でる。

「寝るまでは居てやるよ。」

「もう、政宗まで子供扱いする・・・。」

むくれて見せつつも、ツキはそのまま大人しく目を閉じた。つい先ほどまで寝てたのに、体力が落ちているのか、すぐにゆっくりとした呼吸になつて、寝息を立て始めた。

さつきは赤い顔で苦しげな表情をして眠つていたが、今は顔こそ赤いものの、表情は落ち着いてほつとした。

弱りきつて、ぐつたりしているツキは、いつかの姿と重なつて不安になる。

話を聞けば、前の世界では雪の降らない地域にいたらしい。寒さに慣れてねえんだろうな。

これから着る物と部屋の火鉢を多めにしてやらなければ。

本人は薄着をしていた自分が悪いと言つていたが、喜多の言つとおりツキの体力を考えずに年甲斐もなく雪遊びに夢中になつたオレらが悪い。

それに・・・だ。

「いりうのは、子供扱いとは言わねえよ。」

あどけない寝顔を眺めて、ふと笑みが零れる。

「特別扱い、だ。オレが飯を作つて運んで、寝付くまで傍に置いてやる奴なんざ、ツキくらいのもんだぜ？」

額にそつと唇を寄せれば、ふにゅっとツキの顔が笑み崩れた。

竹取物語異聞 上(前書き)

もへ、これこれいめんなれー。

でも楽しかったの(笑)

むかーしむかしつて、戦国時代から見たら800年位前か？な昔、竹から生まれたかぐや姫と呼ばれる女の子がありました。

つて、私のことなんだけどね。

私竹から生まれたらしいんだよね。

NOT 哺乳類。

もはや人類ですらなくなつたのか私・・・。

「ツキ！いい加減起きろ！！」

だらだら布団で寝転がつていると、養育者その1小十郎じいさんが恐い顔で襖を開け放つた。

「乙女の部屋をノックもなしにあけないでよー。 そんで、ツキじゃなくて、かぐや姫ね。」

「乙女なら、そんならしの無い恰好で寝てるな。朝餉になるから、さつさと起きて仕度しろ。」

名前にについては無視ですか？

仕方が無い。起きるとしますか。

小十郎が畠仕事に行つてくるーとウキウキしながら出て行くのを見送つてから、よいしょと起き上がりて仕度を始めた。

台所では、養育者その2佐助ばあさんがあんが味噌汁を椀によそつて、今日も完璧ーと上機嫌だ。

「シキひめさんおはよー。」

「いや、だから私がぐや姫だつて。」

「ツキちゃん寝癖がついてるよ。」

お前も無視なのか！？

せつせと寝癖を治してくれた佐助に頭を任せてこると、畠仕事に行つたはずの小十郎が殺氣を漂わせて戻ってきた。

やばっ！ 昨日おやつ代わりに、失敬したきゅうつのことがバレたかん！？

それとも、一昨日抜いた大根！？

だらだらと内心冷や汗をかいていると、小十郎は鍬を置いて刀を掴んで私を見た。

「ツキ。」

「『めんなさい』！」

「は？」

土下座をして謝りうつとしたら、小十郎が不思議そうな顔をした。

「おめえを嫁にと、また有象無象共が懲りもせずに来たから、家から出るなと言いたがつたんだが。」

「あ、そうですか。了解です。」

なんだよ。びびらすんじゃねえよ。

焦つたじやねえか。

「が、おめえに聞きて出さなきゃならねえ」とがあるようだな。片付

けたらきつちり話してもらおうか？」

あづー！ 墓穴掘つたああああー！

かくして、全てを白状させられて説教された挙句、二の歳になつ

てまで尻叩きの刑に処せられたのでありました。

「ひ、小十郎め……セクハラで訴えてやる……。

そんな平和……平和か？？まあ、平和か。な田々が過ぎて、やがてついに小十郎と佐助を越える結婚希望者が現れた。しかも五人も。

いや、そこまで期待されるような容姿はしないんすけどね。物語の都合上仕方が無いつて言つか。。。

そもそも私が人類かどうかも怪しこそ、みんな良く頑張るなあと感心しちゃうよ。

これから養育者たちを倒した人たちに会うわけなんだけど。。。

「ツキちゃん、どうしてそんな恰好をしているのかな？」

佐助が顔を引きつらせて私を見ている。

え？ そんなに変かな。自分では結構イケてると思ったんだけど。

「なんで姫が忍装束着てるの！？」

俺様そんな子に育てた覚えはありません！…とやめ泣く佐助。

「だつて、小十郎も佐助も負けたんじや、後は私が勝つしかないじやん？ 結婚なんてしたくないし。ここで自宅警備してる方が楽しいし。」

「ツキちゃん、自宅警備つて、……つまつーートで引受けもつ

てこと？」

「Y e s ‐ T h a t ‐ s l i g h t‐」

「片倉の旦那！…早く嫁に出そ’つ…」

うわーんとバタバタ走り去る佐助。

なんだよ。二一トで引きこもり最高じゃん。

そんなこんなで、無理矢理十一單を着せられた私の目の前には、五人の男共が並んでおります。

赤い服を着ているのが、真田幸村。

赤いもふもふなヅラを被っているのが、武田信玄。

百足を象った兜の鎧姿で、にっこにっこしているのが、伊達成実。奇抜な衣装で、頭から羽を生やしているのが、前田慶次。

ここまではいいんだけど、最後の一名からは、どう見ても結婚希望には見えない黒いオーラが漂ってるんですけど・・・。

真っ白い髪を長く伸ばした男、明智光秀。

「そこ」の白い。志望動機を述べよ。」「

気になつてしまふがなー！」

明智はふふっと笑うと、小首を傾げた。

「私は、美味しい魂を求めてきたのですよ。」「

「……………」

チーン・・・・。

へ、平然と言いきつた！！

結婚関係ないじゃん！！

殺しに来たんじゃん！！

「こんな」ともあるうかと、伝説の傭兵を雇つておいてよかつたわ！

「小太郎。」

名前を呼べば、音もなく私の背後に気配が生じる。

「ちょーーーッキちゃんいつの間に小太郎と契約してたのーーー？」

「そんな金がどこからーーー？」

養育者たちの驚きの声には耳を傾けることなく、私は小太郎に指令を下す。

「殺れ。」

「こくん。

忍者刀を抜いた小太郎が疾風の「ごとく」明智に襲い掛かった。

「まずは貴方からという事ですね。うふふ・・・。」

どこから出したのか、鎌を一本振り翳し、小太郎に襲い掛かる明智。迎え撃つ小太郎は、無言で忍者刀をものすごい速さで繰り出した。

時折、明智の声で、「いたあい（はあと）」とか聞こえてくる。変態だ。変態がいる。

こういう輩は抹殺した方が世の為人の為だ。

そのまま場外乱闘に縋れ込み、家から出て行く小太郎と明智を全員無言で見送る。

小太郎、夕餉の時間までには戻つておいでねえ。

さて、放置していた他四人だけど・・・。

幸村はまあいい。成実もまあよい。慶次も良いとじよつ。

ねえ、信玄公。何でここに来た？

たくさんいる側室さんたちはどうしたのかな？

他のメンバーよつ、倍近く歳をとつてないかな？

まあ、将来一番安穏と生活できそうだけじさ。

じいっと胡乱な目で見ていると、信玄公が片眉を上げた。

「儂か？儂は幸村が不甲斐なかつた時の為に為に来たのだ。気にせず見合ひをするが良いぞ！」

付き添いかよ！――

いい歳した男の、見合ひの付き添い！――

ありえねえと、幸村を見ると、フルフルと震えていた。

ほら、怒ってるじやん。

モンスター・ペアレンシングつてたちが悪いよねえ。

「御館様が某を心配していくださるそのお心！――わざわざ斯様な田舎まで同行してくださつたその懐の深さ！――某、心の奥底より感激いたします！――御館様！――」

「うむ！――幸村！――」

「おやかたさまあ！――」

「ゆきむりあ！――」

「はーはー。後は外でやつてくださいね。」

佐助が手馴れた様子で一人を外に連れ出す。

「おやかたわはああああああ！」

「おおむねああああああーー！」

徐々に遠くなっていく声。

つがわ、田舎にて

八十歳が傷ついて隣にこは行かずが

小一郎 和一春 先の眞面目な顔に、さすがに堪らぬ

よしよしと小十郎の背中を慰めていると、帰ってきた佐助が手にしていた手紙を成実に渡した。

さうき黒脛巾組の奴らが、これを渡してくれつて。

「なんだろ。梵からかな……て、こ、これは……!」

卷之三

すすす・・・と成実の後ろに気配を消して回つて、手紙を盗み見る。

えと、なになに？成実様が見合いの席に行かれたと、お父様に聞きました。せいぜい幸せになるが良い。なれるものならばな。次に顔を合わせた時が、貴様の命日だ。

ついで、なんじゅうせいか?

「誤解だああああーーこれは仕方なくて・・・・・！姫えええええ

！」

がばつと立ち上がると、成実は叫びながら障子を突き破つて外に向かつて走つていつてしまつた。

「どうやら、彼は本命の姫さんがいるみたいなんだよね。」

「ならば、なぜ俺に挑んできた？」

復活した小十郎が、恐い顔で佐助に詰め寄る。

佐助は肩をすくめて。

「片倉の旦那と手合わせができると思って来たんだって。」「そしたらうつかり勝つちゃつて、見合いをする羽目になつたと。そしたら、本命の姫様からあの手紙。

・・・・一体どんな人なのか気になる・・・。

ぐだぐだ感が出てきた御見合いも、あと残るは一人。
前田慶次だ。

肩に乗せた小猿と楽しく遊んでいらっしゃいます。

「えと、もしもし？」

放つておいでごめんなさいね？

恐々声をかけると、慶次はにっこりと笑いかけてきた。

「こいつ夢吉つていうんだ。俺の相棒。」

キキッと首を傾げる小猿に、思わず心が和む。

「夢吉、ね？よろしく？」

手を差し出すと、小さな手がきゅっと私の指を掴んだ。

・・・かわいい・・・。

「ところで、君は恋をしているかい？」

和みかけた空気が、一瞬にして凍りついた。

「恋は良いよ。人を幸せにしてくれるんだ！」

トランス状態に入ったのか、恍惚とした表情で、視線は私ではない違う何かを見ているようだ。

おい。大丈夫か？

困つて小十郎と佐助に助けを求めるけど、二人とも私と目を合わせようとしねえ！！
裏切りものめ！！

「ツキ、俺と一緒に恋をしよう……恋をすれば、幸せになれる……」

やばい。この人病んでる。
絶対病んでる。

「い、いやあ、私、そういう宗教的なのはちょっと……。」

「恥ずかしがることは無いよー俺も一緒にからやー。」

「いや、マジ勘弁・・・。」

どうしよう。これどうしたらいいの？
そ、そうだ。こういうときは・・・。

「恋ならしますので、間に合つてます。」

「『ええええええええ！？』」

仰天した佐助と小十郎の絶叫は無視です。
してますとも。恋。

「そりか。君も良い恋をしていろんだね。ならば、その恋を応援していろよーー！」

満足そうに頷いて、慶次はカツ「良く立ち上がるとそれじゃー」と去つていった。

ふう。助かつたぜ。

「ジキ、おめえ二つの間に・・・?」

「もうだよ。でも、いつなシキちゃんがいつ誰と恋をしてるってい
うの？」

ちょ、恐い顔で寄つてこないでよ。

追る一人をなためて 台所に向かふと 愛し愛しものを手に取つた。

କୁଣ୍ଡଳ ପାତାରେ ଦେଖିଲା ଏହାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା

中大今讓^{アサヒ}すか!!

はあ、大事に大事にちょびちょび飲んでたんだけど、あともうちょ
つとしか残つてないのよ。

「それか・・・。」

「はあ、誰か早く嫁に貰つてくれないかな・・・。」

一升瓶を抱えてエヘラエヘラ笑う私を眺めて、養育者ズは深い溜息をついたのでありました。

続く！

続きです。

いよいよ真打の登場です。

結婚希望者どもを撃退して、平和な日々を送っていたある日。

「ツキちゃん！…」

血相を変えた佐助と小十郎が部屋に転がり込んできた。

「ちょっと、乙女の部屋をいきなり空けるなど、何回言えれば分かるのさ。そこで、もう読者も忘れてると思うけど、私はかぐや姫ね。」

重要なことなので、後編でも言つてみました。

「そんなことより、大変なんだよツキちゃん！…」

「ああそうだ！すぐに支度をしろ！…」

は？何事？

訳が分からぬまま、またもや十一単を無理矢理着せられ、あれよあれよと言つ間に、お密さんの前に引きずり出された。

走らすな！十一単つて10?はあるんだぞ！…

暑いんだぞ！…

「これが噂のかぐや姫か？」

「ええええと息を整えていたり、上から声をかけられて思わず顔を上げた。

「ほう。顔は普通か。」

ケンカ売つてるのか？

「ヤリと笑つて私を見ている男は、右目を眼帯で覆つていて、美形ながらも鋭い目付きのせいかものすつじへ悪さうに見える。だれ、この人。

さつむと説明せんか「ルア！」と小十郎を見ると、小十郎は男を示して。

「Jのお方は、Jの國の帝、政宗様だ。」

「ブハッ！－」

帝！？こんな悪そうな面した男が！？

Jの國オワタ－（^○^）／

「考へてることが丸分かりだぜ？」

そう言つた政宗は、極悪そうな笑みを浮かべて、私との距離を半分以下に縮めた。

近い。近すぎつす。

上半身をのけぞらせると、腹筋がプルプルしだす。

「え、えと、何力私二用テスカ？」

「気に入つた。」

は？何が？

戸惑つている私を置いたまま、政宗は控えていた小十郎に顔を向けてた。

「おい、小十郎！」

「はっ！」

ええ！？なんで小十郎が政宗の前に跪くの！？

びっくりして佐助に解説を求める、佐助は苦笑した。

「片倉の旦那は独眼竜の旦那の右目的存在だからね。」

右腕じやなくて、右目なのか！？

通りで、ど田舎の自給自足なスローライフな割りに、裕福だと思つたよ！

副業か！－！

「そいつ、氣に入ったから、連れて帰るぜ？いいな？」

「御意！－！」

「御意すんな！－！」

「助けて佐助！－！」

口をパクパクさせて佐助を見ると、佐助は襷紙で田尻をわざといらし
く拭つた。

「ツキちゃん、良かつたね。これ以上ない玉の輿だよ。」

てめえ、絶対穀潰しがいなくなつたと喜んでるだろ！－！

い－や－だ－！－！

こうなれば、最終手段だ。

目に涙を浮かべて、小十郎を見上げる。

「いじゅろお・・・私を売るの？..」

「い・う・・・・・・！」

なんで政宗までダメージを受けるのぞ。

「政宗様のところに行けば、お前の生活は安泰だ。お前の将来を思
えば・・・。」

「こじゅろうはわたしがいらなーの？」

ぽろりとタイミングよく涙がこぼれて頬を伝つ。

よし、私は女優！－！

「いらないわけがねえだろ！－！ツキまつりの子だ！－！」

がばあっと抱きつく小十郎。

いける。このまま押し切れ私！

と、思った時。

「ツキちゃん、これ何かな？」

後ろ手に持っていた田薬を佐助に奪い取られる。

「・・・それは・・・。」

「ちー！佐助め！余計なことをしゃがつて！－！」

小十郎と政宗の視線が痛いよ！－！」

結局その日のうちに、私は政宗の住む内裏へと半ば攫われるようにして連れて行かれたのでありました。とほほ。

弘徽殿ひきでんを部屋として『えられ、前ほど自由ではないけど、それなりに楽しく過ご』しております。

暇さえあれば遊びに来る政宗を追い掛け回す小十郎のおかげで、それほど違和感も感じずにするんでる。

え？ 佐助？

知るかあんな裏切り者。

政宗も別に襲つてくるつて訳ではないし、他に女御とか中富といふわけじゃなさうなので、思つたよりも気楽だ。

襲つてきたら、容赦なく潰します。

何をか、については、あえて言ひませんが、潰します。

内裏にきて数ヶ月たつたある夜。

なにやら呼ばれたような気がして、起きると廊下をそっと持ち上げて外に出る。

ほぼ満月に近い月が真上に昇つていて、辺りは篝火が無くても大丈夫なくらいには明るい。

「夜に外へ出るのは感心しないな。」

誰もいないはずの庭から声が聞こえ、はっとそちらを見やつた。銀色の毛並みの狼が、少し離れた場所からこちらを見ていた。

「狼がしゃべつた？」

「私は月に住まう蒼竜様に仕える、白銀といつ。」

「はあ、さようで。」

近寄ってきた白銀は、私の前に座ると、フンフンと匂いをかいだ。ふ、風呂はちゃんと入つてますよ！？

「間違いない。そなたが蒼竜様の末の娘のかぐや姫だな？」

・・・・・はい？あ、そういえば・・・。

最近ツキとしか呼ばれないでの、うつかり忘れかけてましたが、そういうえば私がぐや姫でしたね。

「生まれたばかりだったそなたを、うつかり地上に落としてしまってからずっと探していたのだが、ようやく見つけた。」

「生まれたばかりの子供を、うつかりで地上に落とすなよーーー！」

ついノリで白銀に突っ込みを入れてしまつたけど、そうじやなくつて！－

私竹から生まれたんじやなくて、月の竜の子供なの？

NOT 人類どころか、NOT 地球生命体－？
エイリアンなの！－？

触手とか出ちゃつたらどうしよう！－！

衝撃の事実に愕然としていると、白銀は尻尾をふさふさと振つた。
「明日、月から迎えを寄越す。一緒に帰る。蒼竜様がそなたを待つていて。」

「明日！－？迎え来んの早つ！－！もつと猶予とかないの！－？」

「ない。明日しかダメなのだ。」

ええええええ？

戸惑つている私を無視して白銀は、じゃまた明日！－と去つていってしまつた。

ちよ！－！・・・・・どないせいつちゅーねん。

明日なんてそんな急な・・・。

しばらくその場で立ち廻りしていると、最近ではすっかり馴染んだ氣配がしてそちらに視線を向けた。

「なんだ？オレを待つてたのか？」

女房の一人もつけずに、政宗がこちらに向かってきた。

「んなわけないでしょ・・・・・。」

ああ、政宗とも明日でお別れなのか。

小十郎とも・・・。

佐助と小太郎はここに来てからは行方不明なので、知りませんがね！

そうかお別れなのか・・・。
楽しかったのになあ・・・。

ショボーンとした氣持で部屋に戻り、政宗に引き止められた。

「どうした？ いつも元気はどうした？」

「そうだね。一応お世話になつたんだし、政宗にもお礼とお別れの挨拶をしなきや・・・。

地球外生命体な私がここに居ても氣味悪いだけだらうじ・・・。

「あのね、今先程、私の本当の親つてのが判明しましてね。」

「本当の親？」

「どうやら、私は月から落ちてきた、竜の子供らしいのですよ。」

こんな突拍子も無い話を、信じるかどうかはともかく、話すだけは話さないと。

驚いた顔をしている政宗に、私は白銀に言われた事を話した。

「明日の夜、迎えが来るそうです。その時に帰らないと、もうだめらじくて・・・。短い間でしたが、御世話になりました。」

ペコリと頭を下げる私の肩をがしつと掴む政宗。
ちよ、痛いって。
みしみし鎖骨が言つてますつてー！

「ツキは帰りたいのか？」

顔を上げると、初めて見る政宗の真剣な表情とぶつかり、ドキンと心臓が一際高い音をたてた。

ちょ、なに、これ。

顔に体中の血が上ったような感覚。

「帰りたいのか？」

もう一度尋ねられて、私は堪らずうつむいた。

「帰りたいかといわれても、顔も見たこと無い親だし……。でも、私地球外生命体らしいし……。ここに居ても、そのうち触手とか生えちゃつたら田も当たられないし……。」

竜ならともかく、赤黒い触手系生命体になっちゃつたら死ねる。

「帰りたいわけじゃねえんだな？」

「ま、まあ、ここの中らしが嫌なわけじゃないから。」

自ら進んで帰りたいわけではない。

産みの親の顔は見てみたいけど、私の両親は小十郎と佐助であって、私の暮らす場所はここなんだよね。

でも、それが許されることなのか……。

「よし、ならばオレに任せろ。独眼竜は伊達じゃねえってことを教えてやる。」

くつくづくと政宗が不敵な笑いを漏らした。

「久しぶりに派手なPartyになりそうだぜーーー！」

え？どうことと……？

「ツキ、オレはやることができた。お前はさつさと寝ろ。いいな？」

「は、はあ。」

Let's get psyched up...と呟びながら足早に去つていく政宗を呆然と見送る。

いやあ、英語を話す帝って、すんげー違和感だなあ・・・。

で、迎えが来るといわれた翌日の夜。

私は今、政宗に話をしたことを激しく後悔しているのであります。

「Are You Ready Guys!？」

「Yeahhhh!」

「いいか、テメエら!..気合入れて行けよ!..?」

「うおおおおおおおお!..片倉様燃えるっす!..!」

えと、なんですかね、この族の集会みたいな惨状は。

戦闘服に身を包んだ政宗と小十郎が、先ほどから兵士の皆様に檄を飛ばしていらっしゃるのですが、何でしそう、めちゃくちゃお似合いなのですよ。

あはは・・・」の国の帝は、族のリーダーさんでしたか・・・。

乾いた笑いをしていると、すぐ横に佐助と小太郎が現れた。

「久しぶりに様子を見に来てみれば、随分盛り上がってるねえ。」

「もう言葉もありませんよ。」

「それだけツキちゃんが独眼竜の旦那に惚れられてるってことだよ。」

「う、うひうひうひうひ！見に来ただけならすぐ帰れ！！」

「あらら、真っ赤になっちゃってかわいいこと。」

でもね、と佐助はニヤニヤ笑いを引っ込めて、真剣な顔になった。

「俺様が手塩にかけて育てた娘を、昨日今日現れた輩に横取りされるのは、気に入らないんだよね。」

そう言つと、昇り始めた月を見上げた。

「ま、ツキちゃんは部屋で大人しくして？ちやちやっと片付けちゃうからさ。」

私の頭をぽんぽんと撫でた佐助は、それじゃ行つてくるねといつこり笑つて消えた。

小太郎もその後に続くよつに消える。

「ああ、私が黙つて帰れば、こんなことにはならなかつたのに・・・。

「どうしよう、私のせいだ、怪我したり死んじゃう人が出ちゃうかもしない・・・。」

どうしようどうしよう、それだけを繰り返しているうちに、月か

ら蒼い光と共に何かが降りてきた。
ついに来てしまった……。

「かぐや姫、迎えに来たぞ。」

真後ろで声が聞こえて、びくつとなつた。

振り返れば、白銀ともう一匹黒い毛並みの狼が座つていた。

「人の子に我らを阻むことはできぬ。さあ、行こう。
そういうと、黒い狼が立ち上がりつて私の着物の裾を銜えて引っ張つ
た。

白銀も後ろに回つて私の背中を鼻で押す。

「ツキ……」

促されるままに歩いていると、砂煙を巻き上げてこちらに向かつて
くる政宗が見えた。

つて、刀を六本も構えてるし……

道理で、昨日肩を捕まれて、握力半端ねえなと思つたわけだ……

「ツチ……もうこちいらに気づきあつたか！」

舌打ちする白銀に、私は首を傾げた。

どういう事かと問えば、白銀は月から伸びる蒼い光を示して答える。

「あれは幻覚だ。蒼竜様が見せている幻覚。月から来たのは我と黒
金のみだ。」

・・・・つてことば、皆が傷つくことはないということか。

ほーっと安堵の息を吐く私を、黒金がせかす。

「早く。あの者が追いつく前に……」

狼たちと、政宗……。
月と、この世界。

今も蒼い光を放つ月を見上げて、足が止まった。

必死になつてこゝちに走つてくる政宗。

いつもいつも小言ばかりだけど、面倒を見てくれた小十郎。
なんだかんだ言いつつも、最後は私の為に来てくれた佐助。

人外の生き物でも。

地球外のバケモノでも。

大事にしてくれようとしてくれる人たちが居る。

『昨日今日現れた輩に横取りされるのは、気に入らないんだよね。

』

そう……だね。

突然現れて、さあ帰らうって言われても、そつ簡単に切り替えられるはずが無いんだよ。
産みの親がどうした。

私の両親は小十郎と佐助だ。
私の世界はここだ。

「はやく……」

「『じめん、白銀。私月には帰らない』。『いい匂いがするよ。』

心は決まった。

私はここに居る。

この世界に落ちてきた日から、ここが私の世界。

妙に風いだ気持で白銀の前にしゃがむ。

白銀と黒金は田を見開いて私を見ていた。

「わざわざ探しに来てくれてありがとう。でも、私はここに居たいの。だから、月へは帰らない。」

「そんな・・・今日しかないというのに・・・。」

よろじと白銀がよろけ、黒金が慌てて支えながら私に訴えた。

「ちょっとだけいいんだ。今日しか蒼竜様にお会いする日はないんだ。」

74

ちょっとだけ？

・・・・・・・・・・・・

「蒼竜様はお忙しい身で、滅多に月の宮には戻られない。次に戻られるのは100年後。人界の気に染まつたかぐや姫には、そのような時は生きられぬ。それ故に今日しかないと申してあるのに・・・。」

「よよよと泣き崩れる白銀。

「蒼竜様が再び出かけられた後には、すぐに入界へ帰すと約束する

から・・・！」

涙声で訴える黒金。

「ちよお、待てや。今日たまたま私の産みの親が帰つてくるから、
ちよつと顔出せつて」とー?」

「「そう言つておるではないか。」」

見事なハモリつぱりですね。コンチクシヨーーー！

「聞いてねえーーそんな風には聞いてねえーー！」

もう泣いてもいい？

どうすんの？この騒ぎ。

誰が収めるの？

後ろの方で、やつたるぜええーーとか、わつわつこやああーー！
！とか、もう殺る氣満々な怒号が聞こえてるんですけど・・・。

「シキーーー行くなーー！」

あああああああー必死な政宗に追いつかれちゃうーー！

この状況で、ちよつとだけ用に遊びに行つてきまーすーテヘーーとか
言えたら、どんなに楽か！

ゴルアーー白銀ーー最初つからそつ説明しろやあーー！

どんじん迫つてくる政宗。

後ろからは兵士たちの怒号。

~~~~~つ……良し。決めたーー！

「白銀、あんた責任とつて、この騒ぎを鎮めろ。黒金……わざわざアソブするわよ……途中に乗せやがれ……」

「な、なんとー?」

「ぎょっとする白銀に全ての責任を擦り付けて、わざわざ黒金の車に跨る。」

「半年くらいこの月で休養したら、帰るついで立派にとってー」

それくらい時間がたてば、まだまことに冷めるだらつ・・・・・タブン。

「政宗」「メン…ちゅうへり行ってくるわー事情はこの白銀に聞こえてー…せじ、めったねえーー！」

「シキ……」

「あひらが勝ちだーー！」

その後、じつそりと地上に舞い戻ってきたかぐや姫は、すぐさま帝にとつ捕まり、泣く泣く内裏へと戻つたのでした。そのあと待つっていたのは、もちろんおじいさんからの説教と、おばあさんからのチクリチクリと突き刺さる嫌味攻撃だったのは、言うまでもありません。

しかし、帝だけはかぐや姫の帰還を大層喜び、すぐに血のりの中宮に据えました。

これでもうどこにも逃げられなくなつたかぐや姫は、帝の傍で一生幸せに暮らしたのでした。

めでたしめでたし。

「めでたいわけるかあああああーー！」

竹取物語異聞 下(後書き)

これ、もう竹取物語じゃないよね・・・【壁】ヽ( - - - )・・・  
ハンセイ

## 竜の見る夢

ふと氣がつくと、血室で庭を眺めていた。

オレはなにをしていた？

不思議に思つて辺りを見回すと、部屋の中を覗き込む小さな子供と目が合つた。

四つへりこか？

「ううん小さな子供は居ないはずだが・・・。

いや。どこかで見た事がある様な氣もするな。

「ぱみゅぱみゅぱー、おじーとおわった？」

遊んでいた子供の、愛らしく声で紡がれた言葉。

ぱみゅぱみゅ？

なんだそつや？

首を傾げると、子供も同じ 方向に首を傾げる。

ん？この子供、ツキに似てねえか？

会つたばかりの頃のツキにそつへりだ。

「ツキ、お前また縮んだのか？」

恐る恐る尋ねると、子供はあつと笑つた。

「うー可愛こじやねえか。

手招きすると素直に走り寄つて来て、抱きついてくる子供。

柔らかな子供独特的の抱き心地で、ツキもこんなだったなあと懐かしくなる。

「『まみづ』…おまづがおつかしなこのお…」

あ？ もしかしたら、『まみづ』のせ、父上って意味か？  
つてことは、この子供、オレの？

いやこやこやこや、それはねえだ。  
大体、シキの奴、その辺りの勘が良すぎなんだよ。  
すぐ逃げやがる。

この前も、『まみづ』完全に乗っただったのよ。  
あこづめ、次『まみづ』…って、待てよ？

「オレが父親ならば、母親は誰なんだよー？」  
『まみづ』おぐが、オレは潔白だ…！

「まみづ…」

「やつだ。お前に言えるか？」

「いえるおー…まみづはねー！」

「まみづはー？」

「ぐぐと唾を飲み込むオレに、子供はこいつ笑った。

「まみづ…」

えくんと小さな胸を張つて血饅頭に答えた子供。

おこ・・・。

期待をせぬいて、突き落とすあやうじやねえか、このガキめー。

「『まみづ』にいたのね。」

「まあ、つべー。」

部屋の入り口に現れた女の声に、はっとなる。  
子供はオレの膝から離れて、女に駆け寄った。

顔だ。顔を見れば！――

意を決して顔を上げると・・・逆光で良く見えねえ！  
うへー！

「ままあうえがおつきしないから、ぱぱうえのとこにきたのー。」

「あはは、ごめんごめん。最近眠くて眠くて。あなたの時はそれほどじじやなかつたんだけど、一人田は眠いわあ。油断するとすぐ寝ちゃう。」

そう言つて撫でた女の腹は膨れていた。

その声は、ツキそのもので、自然と顔がにやけてきた。  
「どうか。でかしたオレー・  
見に覚えはねえがな！

つて、そうだよー身に覚えはねえオレの子供ー？んなバカな！

「ぱぱうえ、おかおがこわいいいいー・  
びえええつーと鼻水垂らして泣き出すガキ。

お、おー。じつすじやいこんだよー！？

「あーあ、なーかせたーなーかせたー。  
おまー母親ならなんとかしろよー。」

「うわっ！鼻水つけんじゃ ねえ！！」

「やめろお～。」「  
政宗？大丈夫？」

うなされて目が覚めると、笑いを堪えたツキがオレの隣でガキを抱いていた。

夢か・・・。

前半はともかく、後半は參つたぜ。

「ツキ、その子供、いつの間に生んだんだ？」

起き上がりつつ、オレを見下ろしているツキに聞くと、呆れ顔で答えた。

「んなわけあるかー！」こを辞めた女中さんが連れてきた子供だよ。積もある話もあるだろうから、預かつたの。」

ねえ？と子供と顔をあわせて首を傾げるツキ。  
子供はきやつきやと楽しげにはしゃいでいる。

「ありあ、せつせつまで怪獣だったのに、もう」機嫌なのね～？  
「かいじゅう？」

「そう。政宗のお腹の上に乗せて、驚かせようとしたら人見知りしたのかな、そりやもう凄い泣き声で。」

あの夢は、それが原因か！  
よだれなんか垂らしてねえだらうな。

さつと着物を見下ろしたが、被害を被る前にツキが抱き上げたよう  
で無事だった。

しかし、子供の扱いに慣れてるな。

子供と遊んでいるツキを眺めながら、さつきの夢を思い出す。

オレとツキの子供か・・・。

悪かねえ未来だな。

早く叶つて欲しいもんだけ。

「なあに？にやにやして。気持悪いな。」

「いや、悪かねえとおもつてな。」

「なにが？」

首を傾げるツキを「ガキ」と抱き寄せると、耳元に囁く。

「オレとツキの子供みてぇだな？」

「んな――！」

耳を押さえて真っ赤になるツキから、きょとんと見上げているガキ  
を取り上げると、片腕に抱いて立ち上がった。

「どれ、少し散歩でもするか？」

「あきやーー！」

視界が高くなつたことが面白いのか、大はしゃぎのガキを連れて部屋を出る。

少しの間が空いた後、「さやああああ……破廉恥いいいい……つヒツキの声が聞こえてきた。

夢を現実にするまでに、まだまだ時間がかかりそうだなあ、オイ。

後ろからものすごい勢いで追いかけてきたツキを待ちながら、ニヤリと笑つ。

まあ、追い詰めるつてのも、楽しいんだけどな。

## 姫様襲来（前書き）

愛姫は、ほぼオリジナルキャラとなつております。  
史実の愛姫とは別物として、お読みください。

米沢城に嵐が到来した。

いつものように執務の手伝いをしていると、血相を変えた小十郎が、廊下を走つて部屋に飛び込んできた。

「どうした、小十郎。 静かにしろよお前らしくねえな。」

筆を走らせながら顔も上げずに言つ政宗に、小十郎は大変です！と叫んだ。

「あい姫様が参られました！…！」

「What！…？」

小十郎の言葉に驚いた政宗は、筆を持ったまま、文机を蹴飛ばして立ち上がった。

あーあ、墨が置に飛び散つちゃつてゐるじやん。  
こりゃ置交換だなあ。

それでも拭かないよりはましかなあと、雑巾で置をトントンと拭いていると、それどころじゃねえ！…と政宗に引っ張り上げられた。

「愛が来る！…おー一兵の配置は済んでるんだろうな！…？」

「はっ！整つております。」

はい？なんで兵士を配置するの？今愛姫って言つたよね？姫だよね？  
はてなマークをいっぱい浮かべていると、突然爆発音が聞こえ、政

宗が舌打ちをした。

「来やがつた……」

「ちょ、政宗、どうこい」と？

「今は話している時間がねえ！喜多の所に行つてろ！」

そう言つと、私の腕を振り払い、小十郎を連れてそのまま部屋を飛び出していった。

つてな訳で、今喜多さんの部屋に面るんだだけ……。

ド「オオオオオオオオ……」

「第一防衛線を突破されましたああ……」

「負傷者多数！えーせーへええええ……」

バキイイイイイイ！

「筆頭！……第一防衛線も突破されそうです……」

「テメエら！もつと気合入れていけ……」

「ぎやあああああ……」

「左馬之助ええ……」

「ねえ、喜多さん、私ここに居ていいのかな。なんか外が凄いこと

になつてゐみたいなんだけど。」

喜多さんが淹れてくれたお茶を飲みながら言つと、放つておきなさいと、にこやかな顔で返された。

女中たちが慌てたり恐がつたりする様子はないから、多分敵の襲撃とかじやないんだろうけど、でも外の様子は相当大変なことになつてそうだ。

「愛姫つてだれ？」

「田村清顕様の一人娘で、殿の元許婚よ。」

元許婚つて・・・。初耳なのですが？

自然と据わつてくる目付きに気が付いたのか、喜多さんがとっくに解消されているから安心しなさいと苦笑した。

「その元許婚が来たつて事と、外の惨状はどう繋がるの？」

「おそらく、愛姫様が・・・。」

そう言いかけた喜多さんが、ふと外に目を向けた。  
その途端。

バキイイイイイイー！！

障子を突き破つて、女人が飛び込んできた。

な、何事！？

驚きのあまり、喜多さんにしがみついて硬直していると、女人がむくりと起き上がつた。

「いててて・・・。政宗の野郎、手加減なく技をぶつ放しやがつて・  
・・。つて、あれ？ 喜多？」

「愛姫様、ご無沙汰しております。」

え？この人が愛姫なの？

大正時代の女学生みたいな袴姿をした細身の女人人は、きょとんとした顔でこちらを見つめてきた。

私もマジマジと田の前の女人を見つめてしまつ。

身長は私より頭一つくらい大きくて、容姿は文句のつけようもない美人。

ただし、その手に巨大な斧を持つていなければ。

「喜多、その子誰？」

「彼女はツキと申します。」

挨拶をしなさいと背中を軽く押されて、ぺこりと頭を下げた。

「ツキです。」

「私は愛だ。よろしくな。」

一カツと笑った愛姫は、斧を置くと右手を差し出した。

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

・・・握りつぶされたらどうしようつ・・・。

おずおずと手を差し出すと、ぎゅっと握られた。

女性らしい柔らかな手の感触にホツとしつつ、えへつと笑うと、

愛姫は可愛いな！といきなり抱きついてきた。

ぐはー身がはみ出るー！

容赦ない抱擁に魂が口から出かかつた時、愛姫が撃破した障子の穴から、政宗が飛び込んできた。

「ツキ！無事かー？」

ムリ、しぬ・・・。

愛姫から何とか私を引き剥がした政宗は、くつたりとなつて私の頬をペチペチと叩いた。

「ツキしつかりしろ！・・・愛一テメエの馬鹿力をちつたあ考えろ！」

「あはは、『ごめん』ごめん。ツキ大丈夫か？」

政宗の後ろから覗き込む愛姫の顔には、反省とかそう言つた類のものは微塵も感じられない。

うう、この人危険だ・・・。

政宗たちが兵を配置したのもなんかわかつた気がするよ。

破壊された喜多さんの部屋から、別の部屋に移動して改めて愛姫と対面した。

疲れた顔の政宗と小十郎が私の前に座り、その向い方に愛姫といふ状況だけね。

「政宗と小十郎、邪魔だ。ツキが見えないだろ。」

「うるせえ。何しにきやがつた。」

「遊びに。最近父上がまた見合い話を持つてきて、うざいんだよ。」

「HA！てめえと見合いしたがる男がまだ居たのかよ。」

「そりなんだよ。めんどくさい。」

なんか元許婚同士つてよりも、会話だけ聞いてると悪友同士の再会にしか聞こえない。

でも、政宗も言つてゐる言葉はぞんざいだけど、雰囲気は楽しそうだ。会話にも入れないし、政宗も小十郎も背中を向けているし、私は何一つ樂しくないけどね。

なんで私ここに連れて来られたんだろう？

なんて考えていると、誰かがこっちに近寄つてくる気配がした。

「すみません。片倉様よろしいでしょうか？」

襖の向こうから良直の声がして、小十郎が立ち上がった。どうしたのかとそつちを見ていると、なにやら良直が小十郎に耳打ちをして、それから一人揃つて私をみた。

「なに？私がどうかした？」

立ち上がりつて二人に近づくと、実は……と良直が言いにくそうに言った。

「数人が骨を折つちまつて……。」

「すぐ行く。つてことだから、ちよつと行つてくるね。」

こっちの様子を窺つていた政宗に言つと、渋い顔をして頷いた。

「頼む。」

「了解。」

ちらつと愛姫を見ると、笑顔で手を振つていた。  
いや、貴方が原因ですかね？

あー、肩こつた。

まったく政宗め、元許婚の前に私を連れ出すなよな。

腕を回して肩の筋肉をほぐしながら、良直に続いて毎度お馴染みとなつた兵舎に行くと、かなりの数の負傷者が呻いていた。

「まずは重症者から見るから、案内して？」  
「いりちです。」

案内された部屋には、骨折やら裂傷やらで十人くらいが横たわっていた。

痛そうに呻いているのもいれば、気絶しているのもいる。  
これは・・・遊びにしてはやりすぎでしょう？

一人ずつ治癒をしながら眉を顰めていると、小十郎が現れた。  
「どうだ？」

「死者が出てないのが不思議。やりすぎ。」

最後の重症者を治癒し終えた所で、小十郎を見上げた。

「いつもはこんなに酷くはねえんだが・・・。  
お見合いがどうとか言つてたから、むしゃくしゃしたのかな。  
でも、だからってやつて良いこと悪いことはあると思うのよ。

「兵士の皆は私が看るから、小十郎は城の損害を見て回つて下さい  
よ。流石に物は私じゃ直せないよ。」

冗談めかして言えば、小十郎は少し笑つた後頬むと言つて、兵舎から出て行つた。

「お嬢、手数をかけちまつてすみません。」  
忙しそうに走り回つていた良直が戻ってきて、すまなさそうな顔をした。

「ううん。気にしないで。それより、良直は怪我してない？」

「俺は大丈夫っす。愛様が来ない区画でしたから。」

「そつか。しかし、愛姫って凄いね。あの細身のビコにこんな力があるのか・・・。」

「ううなんすよ。昔からあの方の暴走に、筆頭も片倉様も手を焼いていて・・・。」

「でしようねえ。」

悪い人じやなさそうだけど、周りのことを考えてなさそうなタイプに見える。

子供のような人と言えば良いのか？

「遊びに来る度にこれじゃ大変だ。さて、次は軽症者を診るから、順番に並ぶように指示してよ。」

苦笑しながら良直に頼むと、わっかりやした！と応じてお嬢の前に一列に並べーと叫びながら去っていった。

軽症とはいえ、数十名の治癒をして流石に疲れた私は、重い体を引きずりながら、自分の部屋に戻った。  
いやあ、治癒の練習になつたけど、疲れた。  
畳の上に倒れ込んで、仰向けになると天井を見上げる。

愛姫か・・・。

治療した兵士たちは、苦笑にそしていたけど誰も愛姫を怒つたりはしてなかつた。

困つた姫だけど、悪い人じやない。今日は虫の居所が悪かつたんだろつ、と。

私がこの世界に来る前、政宗と許婚だつた愛姫。

お見合いが嫌で遊びに来たと言つていたけど、本当は政宗に会いたかつただけだつたりして・・・。

考えないようにしていたのに、そつ思つと胸の中がもやもやといつか、むかむかというか、とにかく不快な感じがした。政宗もまんざらでもなさそうだったしさ。

「うー・・・。

やだな。こんな気持。

「うう」と部屋を転がつて氣を紛らわせようとしても、解消なんかされるはずがない。

イライラするし、もうやだ。

一人で悶々としていると、足音が聞こえて部屋の前で止まった。

「ツキいるの？」

喜多さんの声がして、いま一すと返事をすると襖が開いた。よいしょと起き上がりつて、喜多さんを見上げると、手にお盆を持って中に入ってきた。

「顔色が少し良くないうつだけど、大丈夫？」

「ちょっと疲れただけ。大丈夫。」

「なら良いけど・・・。」

そう言いながら私の前に座ると、お盆の上に乗っていたお茶と饅頭を差し出した。

「おいしそう！頂きます！」

一つ摘んで口に入れると、甘さが広がって、さわくれ立っていた気持が落ち着く。

「今日はツキにたくさん我慢をさせてしまったわね。」

饅頭を頬張っていると、喜多さんが微笑を浮かべて言った。

「殿と愛姫様は兄妹の様な関係なの。小さい頃から一緒に遊んだりなさいっていて、愛姫様もあのよつた性格だから、男女の分け隔てもなく接しられてたわ。」

「・・・なんで、婚約を解消しちゃったの？」

「ある事件で愛姫の御父上に嫌疑がかけられてしまって、それで解消になってしまったのよ。」

ふーん。本人たちの意思ではなかつたんだね。

「そんな顔しないの。殿を見ていればわかるでしょ？どれだけツキを大切にしているか。」

「・・・明日はちゃんとする。」

今日だけは、不機嫌なのを許して欲しい。

政宗と愛姫の間には私の知らない時間があつて、それを私が共有することとはできない。

それは仕方がないこと。

政宗と私の時間を愛姫が共有できないのと同じ。

「でも、嫌なものは嫌なんだもん。」

「そうね。」

よしよしと頭を撫でられて、むくれた表情のまま膝の上に頭を乗せた。

「今日の政宗は嫌い。喜多さんは大好き。」

「あら、ありがと。」

「だから、政宗来たら、喜多さんは追い返してくれる？」

「ツキ……。」

「今日だけ。こんなのは見られたくない。」

お願いと並べて、喜多さんは仕方がないわね、と苦笑して頷いてくれた。

しばらく喜多さんと一緒に一人で他愛もない話をしていると、廊下をものすごい勢いで走る音がして、問答無用で部屋の襖が吹き飛ばされた。

開け放たれたんじゃないよ。吹き飛ばされました。

「ツキいいいい……ゴメンなああああ……？」

ぐわしいー！と襖を吹き飛ばしたものがそのままの勢いで突っ込んだ

できて、座っていた私にタックルをきました。

「ぐはーーー！」

予想もしなかつた事態に、なすがまま押し倒されて後頭部を畳に強打した。

なに？ 何事？

なんで私押倒されてるの？

「愛姫様、はしたないですよ？」

驚きのあまり頭が真っ白になつていると、見かねた喜多さんが私の上の塊を取り除いてくれた。

愛姫が泣きそうな顔で私の前に正座をしている。  
起き上がって私も座りなおすと、壊れた襖と愛姫を見比べて、それから喜多さんを見た。

「取り合えず、喜多さん、修理の人とお茶の手配をお願いします。」

「そうね。」

今日は建具屋さんが大もつけだなあ・・・。

喜多さんが部屋を出て行くと、改めて愛姫と向かい合つた。

「で、どうされました？」

「あのな、ツキが私のせいで、かなり無理をさせたと政宗に聞いたんだ。すまない。大丈夫か？」

なるほど。それで飛んできたのか。

やつぱり悪い人じやないんだよなあ。

もうちゅうと周りを気遣うスキルをえ身につけてくれると良いんだけど・・・。

仕方がない。

本当は、こんなこと言つガラじやないんだけど、政宗も小十郎もあの調子じや無理だう。

なんだかんだ言つても、愛姫には甘そつだからな。

「大丈夫じやなかつたのは、兵士の皆です。なぜだかわかりますか？」

淡々とした口調で言つと、愛姫は首を傾げた。

「貴女のせいで、骨を折つた者、裂傷を負つた者、内臓を痛めた者、危うく命を落としかけた者まで居ました。この奥州を守る、大切な兵士を無意味に傷つけ、危うく失う所だつたんです。」

「それは、・・・ちょっと力加減を間違えて・・・。」

「死んでしまえば、間違えたじや済まないんですよ?それに、貴重な戦力を欠いた状態で、攻め入られたらどうするんです?」

「・・・『ごめんなさい。』」

しゅんとしょげる愛姫に、私ははあつと溜息をつく。

見た目は大人だけど、中身はホント子供だ。

「体を動かしたくなる気持はわかります。普通に遊びに来てくださいね、政宗でも小十郎でも、私でもお相手しますよ。」

「ツキが?」

「私も、そこそこは戦えるんですよ?」

ちよつと笑うと、愛姫は目を丸くして顔を上げた。

「ただし、来る前にはちゃんと連絡をください。そして、物は壊さず、暴れたりもしちゃダメです。いいですね?」

「わかった。そうする。シキが遊んでくれるなら、ちゃんとする。」

神妙な顔で頷いた後、上田遣いで私の顔を窺い見た愛姫は、手のかかる年下の妹のようで可愛いと思つ。

政宗や小十郎や皆が困りながらも、つい許してしまつ氣持がわかつたよ。

「兵士の監や、政宗たちにもひやんと謝りにきてくださいね？」

「うん…聞つて来る！」

頷くと、愛姫は来たときと同じように、今度は障子を突き破つて外に走つていつてしまつた。

をい・・・。

夕方近くになつて実家からの迎えが来て、愛姫は笑顔で帰つていつた。  
「つ・・・疲れた・・・。」

襖と障子を吹き飛ばされた部屋とは、別の部屋でぐつたりと倒れていると、同じく部屋を壊されている喜多さんがあ疲れ様と苦笑しながら入ってきた。

「随分慕われてしまったわね。」

「うん。まあ、それは良いんだけど、なんと言つか、あのパワーには参った・・・。」

「今日はもうこのまま夕餉までゆっくりしてなさい。」

「やうすむ。もう気力も体力も限界。」

すぐ近くに座って、繕い物を始めた喜多さんをぼんやり眺めていると、じゅじゅと足音が聞こえてきた。

この足音は、政宗だな。

「私は寝てます。」

目を閉じて寝た振りをすると、喜多さんはくすりと笑った。

「喜多、ここにシキは・・・ひと。」

「お静かに。」

静かに部屋に入ってきた氣配は、私のすぐ近くに腰を下ろした。

「なんだ、寝ちまったのか。」

「色々と疲れたのでしょ?。今日はもうこのままそっとしておいてあげてください。」

「そうか。」

そういうことも、政宗は私の頭を撫でていて、部屋を出て行く氣配

がない。

気持ちよくなり、つい本當に寝そつちやしないの。

「殿。愛姫様への手紙になんと書かれたのですか？」

「あ？」

「先日手紙を出されたのでは？」

「ああ、そういえば書いたな。」

「へー。文通ですか。

ふーん。

不穏な気配を漂わせる私に気づいたのは喜多さんだけで、政宗はまったく反応がない。

「・・・大方ツキのことを書いたのじゃつへ。

「よくわかつたな。」

驚いた様子の政宗に、喜多さんがははつと溜息をついた。

「あれほどに愛姫様が暴れられるなんて、他に考えられませぬもの。

」

「なぜだ？」

「・・・・・殿はもっと女心を学ばれませ。」

そうだ、そうだ。この鈍感男が。

「帰り間際に、愛にも同じことを言われたな。それから、なぜかツキに謝れと。訳わかんねえ。」

わかつて欲しいような、わかつて欲しくないような・・・。  
複雑な気持だ。

寝たふりをしながら、その後も言葉少なく会話をする一人の声を  
聞いてるうちに、いつの間にか本当に眠ってしまった。

目が覚めると、部屋は暗くて、しーんと静まり返っていた。  
あれ？ そのまま寝ちゃってたのか・・・。  
寝返りをうとうとしたら、体が何かに固定されていて、首だけで振  
り返ると政宗が寝ていた。

「起きたのか？」

動いたせいで目が覚めたのか、政宗がぼんやりと目を開けて、私を見た。  
「うん。ここ、政宗の部屋？」  
「ああ。お前の部屋はまだ襖が入ってねえからな。」  
「そつか。

拘束が緩められたので寝返りをうつて政宗と向き合ひ、やんわりと抱き寄せられる。

暖かさと安心する匂いに、再び瞼が重くなってきた。

「今日は色々悪かったな。」

「？」

微かに首を傾げると、政宗は少し笑った。

「だが、嬉しいもんだな。」

「なにが？」

今にも閉じそうな目を頑張って開けながら聞き返すと、政宗は私の耳元で囁いた。

「やきもち妬いたんだろう？」

・・・・・は？

今にも眠りに落ちそうだった目が、一気に覚めた。

「な、な、な・・・・・！」

喜多さん！？あの後何を言つたの！？

「ぶつ。顔が真っ赤だぜ？」  
「ハハハハハハハハ！」

「ヤーヤ笑う政宗から離れようと暴れるが、びくともしない。この馬鹿力が！」

「可愛いな。」

「あやー！政宗が気持悪い！」

「H A H A H A、可愛い事をいつ口はいひしてやる。」

「何をすん・・・！」

抜け出そうと必死に暴れる私を容易くホールドして、政宗は自らの口で私の口を塞いだ。

角度を変え、更に深くなる行為に、呼吸すらままならない。

「~~~~~つ……」

苦しくなつて政宗の腕をタップして、ようやく解放されたけど、抜け出そくなんて考えはもう吹き飛んでくつたりと布団に沈んだ。

「たまんねえな。癖になりそうだぜ？」

ペロリと自分の唇を舐めた政宗が、妖しい笑みを浮かべた。

その後、さんざん声が枯れるまで喘がされ、次の朝薫多さんご、自製と言つものを政宗に教えるように泣きついたのでありました。

## Trick or Trick!（前書き）

ハロウインってことで書いてみましたが、ハロウイン関係ねえ！  
つて話になっちゃいました。

趣味丸出しだすみません(・\_・)^(A

## Trick or Trick!

一人部屋で繕い物をしていると、庭に白銀と黒金が現れた。

「久しぶりだね。遊びに来てくれたの？」

縁側に出て一匹の頭を撫でていると、黒金が尻尾を振つてもつと撫でろと頭を寄せてきた。

「遊びに来たというよりは、使いだな。」

白銀が答えると、黒金も一ぐれりと頷いた。

「使い？蒼竜様の？」

「いや、月神様だ。」

月神様の使いと聞いて、不安になるのはどうしてでしょうねえ？しかし、聞かないわけにもいかないか。

「どんな御用かしら？」

恐る恐る尋ねると、一匹は顔を見合せた後、同時に私を見上げて言つた。

「「Trick or Treat?」「

「は？とつづく・・・・つて、まさか・・・。」

「Trickだな？」

「やつと白銀が笑い、黒金がワン！と吠えた。

ボフツー！

頭の上と、後ろで音が聞こえ、慌てて振り返ったが、何もない。戸惑いつつ一匹に今は何だったのか聞こうとしたら、すでに姿はなく、紙切れが一枚落ちていた。

一体何だつていうのよ。

落ちていた紙を拾つて見ると、一言だけ書いてあった。

「効果は明日の朝日が昇るまで？」  
「どうことひこと？」

「ツキ、あいつらがまた来たの……おい、なんだそりや。」

部屋の縁側からこちらを覗いた政宗が、目を見開いて硬直している。  
「なんだって、なにが？」  
「気がついてねえのか？」  
「気がつくって何に？」  
「ちょっとこっちに来い。」「

手招きをされて、政宗の傍に行くとしげしげと私の頭を眺めた後、手を伸ばした。

「なに？」  
「本物だな、こりゃ。」「  
ひや！」

きゅっと何かを引っ張られた感覚がして、思わず首を引っ込めた。何を引っ張ったのよ、もづ。  
と、自分の頭を撫でようとした手を伸ばすと、なにやらやわらかくて暖

かい、もふっとした感触がした。

な、なにこれ……。

両手を上げて確認すると、それは一個並んでいる。

「ちなみに、尻にもつこぐるぜ?」

「こよおおおー!？」

後ろに手を回された瞬間、電撃のような痺れが全身を駆け巡った。力が抜けて、政宗にしがみつきながら自分のお尻を見ると、着物に穴が開いていて、そこから真っ黒い長い尻尾が生えてました。

### Trick or Treat?

そういうえば、今日は神無月の月末だっけ。  
つてことは、ハロウィン?  
で、悪戯?

・・・まさか・・・・。

手にした紙をもう一度見る。

まさか、まさか、まさか・・・・!-

明日の朝までこの姿のまま・・・・・?

手にした手紙が、はりつと落ちた。

今日はもう何もしないーと政宗に宣言して、部屋に閉じこもつております。

政宗曰く猫耳と尻尾のようで、自分の意志に関係なく動くそれらを、あざやん撫でくり回されたりさりげない氣味です。

まったく、なんの「スプレー」だよ。

ぶすっとむくれながら、部屋の隅で不貞寝をしてごると、なにやら手にした政宗が戻ってきた。

「まら、ツキ、こっち見ろ。」

ふりふり、ぱたぱた。

政宗の奴、完全に人で遊んでるよね？  
殴つてやるつかしさ。

「まらまら。  
ぱたぱたぱた。」

ふざけんなーと、政宗に怒鳴りつと振り返ると、パタパタとゆれる

猫じやらしが目に入った。

蒼いリボンがついた、猫じやらし。

そんなのどうにあつたんだよ

と、呆れつつも視線を外すことができない。

ぱたぱたぱた

• • • • • • • • •

ପ୍ରକାଶକ

ばた。

たし

はつと我に返つた時には、猫じやらしを手で押さえつけていた。あつと汗が流れる。

私の意志ではない！

氣が一いたら手が勝手に伸びてたんだよ!!

つと笑つていやがつた。

「ほれ。」

掌をすり抜けてまた振られる猫じゃらし。

それでも田が離せずこ、右へ左へと顔が揺れる。

「ハセキ・アキラ」

「はははっ……ほれほれほれ……」

「おれにここにこ……！」

猫じゅらしかり田が離せない自分が憎い……！

ほれっと高く上げられた猫じゅらしが掛けて、ジャンプ。  
でもするつとかわされて、また田の前にふりふりと猫じゅらしが現  
れる。

尻尾がぐるぐる回って、もう我慢ができない……

「おのれ……絶対捕まえてやる。」「  
「じゃれるものならやつてみろ。」

上等じやあああ……！

だだだだだだだだだ……！

「ほらよ……！」

「ねつぢめ……！」

ビビビビビビビビビビビビ……！

「甘こな……」

「ムキヤアアアアアア……！」

だだだだだだだだ……！

「つむせえぞッキー廊下は静かに歩けと…………シキッ！」

首だけを出した小十郎が、怒鳴りかけた後、私の姿を見て目を丸くした。

しまった！！コスプレを見られた！！

頭とお尻に手を当てたけど、時すでに遅し・・・！

「さつきから何人もすれ違つたじやねえか。何を今更。」

呆れ顔の政宗に止めを刺され、。「とその場に崩れ落ちた。終わった・・・。

その後、噂が噂を呼び、わらわらと人が集まつてきて、どえらい目に遭いました。

もみくちゃにされて、引っ張られたりなでられたりして、ついに悲鳴を上げて逃げ出し、ただ今政宗の部屋の押入れの中でガクブルしております。

恐い。みんな容赦ねえよ。

特に、女中軍団！

可愛いとか言って、引っ張り合いしやがった。

尻尾が千切れるかと思つたわ！！

「おーい。ツキ、もう誰もいねえから、出て来い。  
ちょっとだけ開けられた隙間から、政宗が呼んでいるけど、恐いからヤダ！！

「恐くねえよ。ほら、出て来い。」

「・・・本当に誰も居ない？」

「居ねえって。小十郎が全員まとめて説教してん。」

本当に？

恐る恐る押入れの襖を開けて、外の様子を窺う。

部屋の真ん中で胡坐をかけて頬杖をついている政宗が居るだけで、確かに誰も居ない。

そろりそろりと出て、再度確認をした所で、安堵の溜息を吐いた。

「そういう所は、本物の猫みてえだな。」

「つぬさい。政宗もあの地獄を味わえばいいんだ。」

乱れた着物を調べ、ぼさぼさになつた頭を手櫛で整えていると、政宗が手招きをした。

いつの間にかその手には櫛が握られている。

「まだ髪が乱れてる。直してやるから来い。」

「そう？」

素直に近寄つて、政宗の前に背中を向けて座ると、想像以上に優しい手つきで髪を梳かし始めた。

「結構うまいねえ。」

「オレにできねえことはねえ。」「はいはい。」

軽口を叩きながらも、気持ちよさで目を開けてつむりとやれと催促をしてしまう。

もう耳の辺りとか、最高に気持ちいい。

そのうち眠くなってきて、ふらふら頭が揺れだして、意識が朦朧となつた。

「ねむー・・・。」

「少し寝るか?」

「うん。」

頷くと、じてんと後ろにひっくり返った。

当然後に居た政宗に寄りかかるような形になり、笑つたのか寄りかかつた体が僅かに揺れた。

「仕方のねえ猫だな。」

「ねこいのな。」

私の膝の裏側に腕をかけ、反対の腕を背中に当てる、ふわりと体が浮かんで、それから暖かなものの上に下ろされた。

うつすらと目を開けると、すぐ目の前に政宗の顔があつて、膝の上に抱き上げられたのがわかつた。

くあつとあぐびをすると、政宗の胸に頬を寄せて目を開じた。

ツキが寝ている間にと手に入れた物を持って部屋に戻ると、寝かせた場所に姿がなくどこかに行つちましたのか？？と思つていると、文机の下から尻尾がはみ出ているのに気づいた。

よっぽどいじり倒されたことが恐かつたのか、机の下に隠れていたらしい。

「今日はもういいの部屋には誰もいねえよつてあるから安心しろ。」

「そうなの？」

「ああ。だから出て来い。」

頷いて手招きをすれば、ツキは素直に出てきた。  
オレが持つてきた物に気づいたのか、辺りの匂いを嗅ぐ仕草をして、首を傾げるツキ。

「なんか良い匂いがする・・・・。」

「ああ、これだ。」

少量の液体を入れた徳利を揺らすと、ふらふらと吸い寄せられるように近寄ってきて、オレの膝に手をついて徳利を見つめている。  
良い反応だぜ。

「飲むか？」  
「飲む！」

中身が何かも聞かず即答したツキに、盆に液体を注いで渡した。  
琥珀色の液体がツキの小さな口に吸い込まれる。

「くづと飲み込む音が静かな部屋に響き、数瞬後ツキが恍惚の表情を浮かべた。

「「」や「ま～うま～。」

「だううな。マタタビ酒だ。」

「またたびい～なるほど?今私猫ですしい?」

そつぱうとツキは、じてんと畳の上に転がって、うつとつと畠を細めた。

「気持がいいだろ?」

「うふ。いいよ・・・。」

とろんとした畠でオレを見上げるツキは、最高に色っぽい。作戦成功だぜ。

少し酒を口に含んで、口移しで飲ませれば、オレの首に手を回してもつと寄越せと強請る。

最高だ。最高だぜツキ・・・!-

そのまま帯に手を掛けようとしたとき。

「ドス!」

「ぐふっ!-。」

いきなりツキの膝がオレの腹にめり込んだ。

ちよ、あと数寸下だつたら、大惨事だぞ。

「「やは～！」

腹を押さえて悶絶するオレに構わず、ツキは立ち上がるとそのままふらふらと部屋の外に行つた。

「たのしいいい！」「やははははは～！～！」

次第に遠のいていくツキの声に、痛みを堪えて立ち上がると慌てて後を追いかけた。

「ツキ！待て！部屋にもどれ！！  
「や～だよ～！」「やはははは～！～！」

ヤバイ。ただの酔っ払いだ。至急回収しねえと、轟きにばれたら大変なことになる。

走つて捕まえよつとすれば、のうづくらつと避けられ、そのままツキは城中を暴走し歩いた。

「何事ですか政宗様！？」  
「小十郎！ツキを捕まえろ～～～」  
「は～？ツキ！？」  
「「やはははは～！～！」

向かいから「ひりに来る小十郎と挟み撃ちだー

両手を広げてツキを止めようとする小十郎に、ツキはスピードを緩めるこゝなく突っ込んでいく。

「「やはは～！」じゅ～だいすき～！～！」

ପ୍ରକାଶକ

「照れてんじやねええええええ！」

てれつとなつた小十郎が動きを止めてる隙に、ツキは脇をすり抜けそのまま先へと走り去つた。

「ツギに何を?」

「マタタビ酒を飲ませたら、暴走しやがった。」

・・・・何をなさるおつもりだつたんですか?」

「アーニーはかく導いていた」

呆れる小十郎を振り切つて、ツキの後を全力で追いかける。

「ツキ！ ちょっと待て！」  
「や～だ～！ もつと走るの～！」  
「なんで走るんだよー？」  
「そこに道があるからねー。」

「あるのは廊下です。」

ツキの走る先に、穏やかな微笑を湛えて立っていたのは喜多だった。

目が覚めると朝で、あの手紙どおり、猫耳と尻尾は消えていた。代わりに、部屋には少量のお酒が入った徳利と、力尽きている政宗と小十郎がひっくり返っていた。

なんですか？

## 痛みに効く薬（前書き）

このお話をテーマは、生理です。直接的な表現は避けたつもりですが、苦手な方は回れ右をしてください。

## 痛みに効く薬

「数日、ずっとイライラして、そろそろかなあとは思つていた  
んだけど、やつぱり来た。

女人なら避けて通れない毎月のことなんだけど、それでも気分は  
憂鬱だ。

元の世界のような安心な衛生用品など、ここにあるはずもなく、  
ただひたすら部屋にこもつて大人しくしているしかないんだよね。  
前の世界では不規則で数ヶ月來ないことも当たり前だったのに、こ  
っちの世界で生き返つてから数ヶ月もすると、毎月決まって新月に  
なると始まるよくなつた。

毎月、決まつた日からほほ一週間姿を消す私。

もう、野郎共にもモロバレですがなにか！？

「とにかくしょー！

そんなわけで、今月も痛いだるい辛いと、お腹を抱えてうずくま  
つて寝ています。

一日田を過ぎれば、だるいだけで痛みとかはなくなるんだけど、今  
日はその一日田でピークだ。

「うつ・・・痛い・・・。」

奥底からずーんずーんと、鈍い痛みが湧き上がつてくる感じに、思  
わず呟いてしまう。

誰も居ないし、何もできないのはわかつてゐんだけど、言わずにほ  
いられないのよ。

当然、鎮痛剤なんて存在しないしね。

貧血氣味で起き上がるのも億劫なんだけど、水分は取らないもつとひどくなる。

布団から起き上がって、喜多さんが置いて行ってくれた湯飲みを手に取った。

はあ、飲みすぎるとトイレが面倒臭いから、そこそこにしなきゃね。

と考えつつ、お茶を一口飲もうと口に含んだ時、僅かに開いた襖から、こちらを覗いている政宗を見つけて吹いた。

「ぶは！ げほっ！ 鼻に入った・・・！」

て、手ぬぐいくれ！

むせていると、部屋に入ってきた政宗が、近くにあった手ぬぐいを差し出した。

「Sorry・大丈夫か？」

「だいじょーぶ。ありがと。」

手ぬぐいを受け取つて、こぼしたお茶を拭き取り、それから政宗を見上げた。

「どうしたの？ なんかあつた？」

生理中に政宗がこの部屋に来たことは一度もない。男の人気が、生理中の女人に触ることは、穢れに触れることになるからだめなんだって。

非科学的な話だけど、それがこの世界の常識ならば、それに従うまでも私もそのようにしていたんだけど・・・。政宗の方から来た場合はどうすりや良いんだ？

「いや、なにもねえよ。」

「んじゃ、どうしたの？ 今日はここに来てからこけないんじゃないの？」

「まあ、そりなんだが……。」「

どうにも歯切れの悪い政宗に、首を傾げる。  
……もしかして……。

「心配して来てくれた……の？」

「わ、悪いかよ！？」

顔を赤くして逆ギレしだした政宗。  
うわあ、可愛い……！

思わずくすぐす笑つてしまつと、ますます拗ねた表情になる政宗に謝つた。

「じめん。心配してくれてうれしいよ。ありがと。」

「……顔色がよくない。寝てる。」

拗ねつつも、気遣ってくれる政宗に、素直に頷いて布団の上に寝転がる。

「大丈夫。病気じゃないから。政宗もここに居ると小十郎に怒られるから、そろそろ行つた方がいいよ？」

「このオレが穢れなんぞに負けるはずがねえだろ。」

H A ! と笑う政宗に、どう返したらいいか困つていふと、いつものように頭を撫でられた。

まあ、そもそも非科学的な話だし？

穢れるとかそんなことはどうでもいいんだけどさ。

漏れたりしたら死ぬほど恥ずかしいので、できれば早めに離れて欲しいなあと思つちやうんですが。

まあ、さつさき換えたばかりだからじばりくは大丈夫だらうけど。。。

「腹が痛いのか？」

お腹に当てている手を見て、政宗が聞いてきた。

「お腹も痛いんだけど、腰も痛い。いつもいつもあつためると、血流がよくなつて楽になるんだよ。」

「ふーん。そういうもんなのか。」「

そう呟くと、頭をなでていた手を腰に当てる、ゆっくつとめすつた。それがびっくりするくらい効果的で、腰の痛いのがゆっくつと取れてきた。

「あー、痛くなくなつてきたよ。ありがとう。」「

「女つてのは大変なんだな。」「

「まあね・・・。」「

体がぽかぽかしてきて、痛みも薄れて眠くなつてきた。

「ありがとう。もう大丈夫だよ。そろそろ仕事に戻らないと、小十郎にバレるよ?」「?

「・・・・そうだな。」「

名残惜しげに手を離すと、政宗は立ち上がった。

「後で喜多に温石を持つてこさせる。大人しく寝てろよ?」「

「うんわかった。政宗、ありがとうね。」「

「Welcome.」「

少し笑うと、政宗は部屋を出て行った。

「さあ、おひでに。」と喜多さんも温石を持って部屋に来た。

「殿がこれを持ちこめて言っていたんだけど……。」

「ああ、温めると楽になるからね。」

「やうなの?」

「おや? もしかして、誰もまだ知らないのか?」

「冷やしちゃダメなんだよ。温めて、血の流れをよくしてあげると楽になるよ。あと、腰をさすりつてもらうのもかなり楽になるんだよ。それから、水分は多めに採つて、脱水症状にならないようにするの。」「そうなの? 知らなかつたわ。これからはみんなにも教えてあげましょ!」

「うん。私ももっと早く言えばよかつたね。」

布で包んだ温石を背中に当てる、はふーっと息を吐いていると、喜多さんが首をかしげた。

「でも、なぜ殿がその事を知つていたのかしら?」

「私が教えたから・・・って、あ。」

しまつた。ここに来たことは言わぬ方が良かつたんだつけ。

恐る恐る喜多さんを見ると、びっくりはしていいるけど、怒つてはないよつだ。

「殿がここに来たの?」

「う、うん。」

「何をした?」

「心配で様子を見にきたんだって。」

「あらあら・・・。」

くすくす笑い出した喜多院と、ほつとしつつ大丈夫かな・・・と尋ねた。

「いいんじやないかしら？殿方にも少しばかの苦しみを感じていたきたいもの。それに、いつかはこうなるんじやないかって思つていたのよ？」

「なんで？」

「初めての時は、ツキが居ないだけですとそわそわされてて、小十郎に小言を言っていたんだもの。病氣でも何でもないから、心配は要らないつていくら言つても落ち着かない様子だつたし。」

生理明けつてバレバlena状況で、顔を合わせるのが恥ずかしくてたまらなかつた私に対して、政宗は『ぐく普通な態度で居んだけど・・・。

ふーん。私がいないところではそんなだつたんだあ

「実は先月もツキの様子を見に行つていたらしいのよ。これは他の女中から聞いたんだけどね。通りかかった女中に見つかって、慌てて方向転換して去つて行つたらしいわ。」

「へえ・・・。」

おっといかんいかん。顔がにやけちゃう。

恥ずかしくて、照れくさいけど、心配してくれる気持ちが嬉しい。

また来月、照れくせうつな顔をして、ひょっこり現れるんだろうなあ。

今度は温石を持つて。

喜みさんとくすくす笑いながら、温石だけではない温もりにて、  
痛みが引いていくのを感じた。

## 痛みに効く薬（後書き）

本日痛い腹を抱えながら、筆頭botをしていたら、あたためてやうか？ツイートされて、閃いたものです。その後、あつためてくれるの？って聞いたら、俺に頼らずその辺を走つて来いよと、地に叩きつけられました（笑）



小十郎が到着した翌朝の出来事

「おはよう。早いな。」

「おはよつ。うん。流石に今朝は自然に日が覚めたよ。久しぶりによく寝た。」

あれ？なんか小十郎、あまり機嫌が良くない？どうした？

「なんかあつたの？」

と、うつかり聞いた私が馬鹿でした。

「何かあつたのか、だと？」

「こ、小十郎さん？」

ゆらりと揺れたあと、小十郎は私の肩をがしつと掴み、前後に揺さぶった。

「松永が夢に出て来やがつた！俺の畠に現れて、土を耕してやがつた！」

「夢！？つてちよ、まつ、て、あたつ、まがつゆれつー！」

松永の夢を見たつてだけで、この「乱心つぶりはなに！？」

「更に、俺の育てた大根を引き抜いて、立派だなど褒めて、拳句に大根に頬擦りしやがつたんだよー！」

「おえつ、きもつ、やめつ！」

「あいつが、あの顔で！俺の大根にーくあああー腹が立つーー！」

腹が立つつてより、笑っちゃわないのか！？  
つづーか、頭がもげる…誰かたすけてえええ…！。

### いつき親衛隊の会話

- A 「ツキ様つてかつ」いいな。」
- B 「お前、いつきってもんがありながら、ツキ様につつつをぬかす  
たあ、親衛隊として許せねえだよ。」
- C 「けんども、いつきにはない良也がツキ様にはあるべ？」
- B 「お前もか！？」
- D 「実は、おらもちよつといいなあつて思つてたんだべ。」
- A 「だべだべ？ いつきは守つてやりてえつて感じだけんども、ツキ  
様は踏んでける～つて感じがするべ。」
- C 「殴つてける～つて感じがするな！」
- D 「女王様つてやつだべな！？」
- B 「お前ら・・・違うべ！ ツキ様は、お仕置きよつて言つて、お  
らたちのケツを順番に鞭で打つんだべー！」
- A C D 「・・・・それいいな・・・・。」「

「いっちゃん、親衛隊の面子が変わってる気がするんだけど・・・

「は？」  
「気にしなえていたよ。あいつは地獄に送りでせうとしたべ、

怖いものバレました

「なあ、お前死体が動くのが怖いんだって？」

卷之三

「ロワイヤル」

「布川さん?」

「無駄口叩いてないで、さつさとそこの大穴埋めるよ！」

「あ、そこ」の影で南部の兵士の死体が動きやがった！！

「ぐはー！ シキ、首が絞まるてる、オレの首が・・・」

「ねえ！どこに居るのよー！」

「オレによじ登るな！」「冗談だ。」

「…………政宗の…………ばかあああああ！！嫌い！もう一緒に寝ない！！今日から小十郎と寝る！！！」

「ちょ、待て！そんなに怒るこたあねえだろー？」「

「知らない！！政宗なんて、ゾンビと一緒に寝ればいいんだー！うわああああん！！」

「ツキ！」

その後、むくれるツキの後ろを、謝りながら付きまとう筆頭の姿を、多数の農民に見られたとか。

### 米沢へ帰る日の朝の会話

「なあ、ツキそれってオレのだよな？」

「そう。貰っちゃったよ。」

「ああ、それは良いんだが……お前が着ると、また違ったイメージだな。」

「似合わない？」

「いや、そんなことはねえが……。」

「佐助が詰めてくれたんだよ。」

「この体格差を良く詰めたもんだな。」

「だよねえ。それに、ぴったりつてのもす」こよね。「

「An? ぴたりだ?」

「そつ。肩幅とか、腕の長さとか、着丈もだけど、胸周りとか測つてもいいのに、見ただけでどうやって合わせたんだろね。」

「胸周りだと?」

「ちょ、政宗? 顔が怖いよ?」

「胸周り・・・。」

「連呼すんな! そして、ガン見すんな! ー!」

おやまつせまでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4680x/>

竜の華は朧月に微睡む

2011年11月21日11時35分発行